

# 「両テンビン」世帯の人々

## とりまく資源に関連する複合性への志向

An Ecological Study of the RYOTENBIN Household  
in Otohama, Chiba

卯田宗平

はじめに

①千葉県安房郡白浜町乙浜の概要

②「ハマ」での生業活動

③「オカ」での生業活動

④「両テンビン」世帯の生業構図

まとめ

### 【論文要旨】

本稿は、房総半島一海付き村を対象に、年間を通じて「ハマシゴト（漁）」と「オカシゴト（農）」を組み合わせる「両テンビン」世帯に焦点をあて、「両テンビン」の生業構図を明らかにし、生業を複合とする意味を問うものである。

「両テンビン」世帯は、夏季に「ハマ」で魚貝類を対象とする磯漁を中心とし、冬季には「オカ」で温暖な気候を利用した花卉栽培に従事している。とりわけ夏季の「ハマシゴト」において、「両テンビン」世帯の海女たちは、自らが経験したその日の海況に関する情報を夫である刺し網漁師に提供する。刺し網漁では、気象や海洋などの漁場環境に敏感に影響を受けるイセエビを狙うゆえ、投網前の「潮流」や「風波」に関する情報がより重要となるからである。乙浜において、年間を通じて漁撈活動を行なう「ハマイッポウ」世帯は、予備の刺し網数や船外機の排気量を増やすなど、個々の装備を充実させることで漁撈活動に対応している。一方、夏季にしか漁を行なわない「両テンビン」世帯は、海況に関する最新の情報交換によって対応している。

対象地域では、全158世帯のなかで「ハマイッポウ（漁業専業）」や「オカイッポウ（農業専業）」と呼ばれる世帯数の方が多い。このなかで「両テンビン」世帯は、わずか7世帯を数えるにすぎない。「ハマイッポウ」や「オカイッポウ」世帯が多いことから分かるように、必ずしも複合的な生業を行なわなければ生計が維持できないというわけではない。このなかで生業を「両テンビン」とすることは、いわば「不十分な生産力を補う相互補完的な戦略」ではなく、「潜在的な生産力を最大限に引き出す戦略」という意味合いが強い。

## はじめに

本稿は、年間を通じて「ハマシゴト（漁）」と「オカシゴト（農）」を組み合わせる「両テンビン」と呼ばれる世帯を対象に、「ハマ」と「オカ」との協奏である「両テンビン」の生業戦略を明らかにし、生業を複合とする意味を問うものである。

農業や漁業といった生業活動を扱った研究は、従来、個々の技術や知識を高度に専門化・細分化することに大きな関心が寄せられてきた。例えば、漁撈活動を扱った民俗学的な研究では、各地の漁法や漁具、漁撈暦、観天望気の手法についての記録が蓄積されている。こうした漁撈技術は、その内容が言語や動作として明示化できるため、聞き取りでの採集が可能なのである。むしろ、さまざまな生業活動の、局面に応じた多様な知識を詳細に分析することは、生業活動への理解を飛躍的に増大させる。

しかし、その理解が微に入り細にわたるにしたがって、たちまち生業活動の全体的視野、いうならば活動相互のバランスを見る目が影を潜めるのもまた事実であろう。このことは、安室の次の言葉に集約できる。「こうした研究の特徴は、特定部分の資料化には大きな威力を発揮するが、全体を総合化する方向性が乏しいことにある。つまり本来、生業研究とは人の生を成り立たせるための仕組みを明らかにするものであるはずが、民俗学では生業がいくつかの要素に分解され個々の技術としてしか論じられていない」[安室 1998: 34]。

こうしたなか安室は、生計が個々の生業の選択的複合の上に成り立つとし、とりわけ生業の複合性に注目している。この生業の総体を把握する試みは、在地住民の危険の最小化や利益の最大化といった側面を一面的に強調することの問題性〔菅 2001: 21—23<sup>(1)</sup>〕はあるものの、生業の全体像を問う際の重要な切り口となる。

著者は、この複合生業論に立脚しながらも、時間性と空間性を明確にし、生業全体を体系的に検討してみたいと考える。とりわけここでは、研究の視点をより現代におき、聞き取り調査だけでなく観察調査に基づいて接近する。生業の複合性を問う際のアプローチを確認してみると、第一に、関係する生業要素の個々の特徴を理解すること、第二に、それぞれの生業要素間の関係性を把握すること、第三に、生業の複合性を成り立たせる要因、また生業を複合する在地住民の心意を問うこと、この3つの段階がある。

つまり当該地域のどこでどのような生業活動が展開されているのかを把握し、それがいかに組み合わされているのかという各生業間の構図を見る必要がある。その上で、生業の複合性を可能にする自然条件や社会条件、またそれを裏打ちする動機といった、生業活動の背景に視点を向けるのである。

もちろん各生業への詳細な検討が必要であり、またマイナー・サブシステムといわれる、経済性にとらわれない要素への注目も不可欠である。<sup>(2)</sup>すなわち、個々の専門分野を問うという従来の分析的学問姿勢に加え、当該地域の生業の体系化をはかる必要があるのである。生業研究が転換期を迎えている今日、生業の全体像のなかから“生きる技”の本来の姿を問う必要があろう。

生業の複合性に着目した既往の研究を振り返ると、三浦半島周辺において、年間を通じて農業と

漁業とを組み合わせる「農間漁民」の実体を取り上げた辻井〔辻井 1977, 1980〕や、水田を中心とした生業の複合形態のあり方を示した安室の一連の研究〔1998〕などがあるが、生業活動とりわけ海付き村の生業活動を包括的に捉えた論文は少ない。<sup>(4)</sup>

そこで本稿では、房総半島一海付き村を対象に、「ハマシゴト（漁業）」と「オカシゴト（農業）」それぞれの特徴を理解し、年周期と日周期における個々の生業活動の組み合わせを明らかにする。その成果を踏まえ、最後に海付き村において生業を複合する意味を検討してみたい。

## ①……………千葉県安房郡白浜町乙浜の概要

千葉県安房郡白浜町乙浜は、房総半島の南端に位置し、南には太平洋が広がる。集落の北側には標高 100 m 前後の千倉・館山南部丘陵地がみとれる。東は千倉町白間津と西は白浜町白浜に接している（図 1）。乙浜地区の面積は 1.56 平方 km、世帯数 158 戸、人口 447 人（男性 214 人、女性 233 人）である。

集落内は国道 410 号線が海浜側を東西に横断しており、民家は道沿いに建ち並んでいる。乙浜の住民は、この国道 410 号線から山側を「オカ」とよび、海岸方向を「ハマ」とよぶ。そして、「ハマ」で行なわれている潜水漁や刺し網漁、一本釣漁といった漁撈活動全般のことを「ハマシゴト」といい、「オカ」で行なわれている花卉栽培や水稻、自家消費用野菜栽培といった農業活動全般のことを「オカシゴト」という。

この海付き村では、年間を通じて「オカシゴト（農業）」と「ハマシゴト（漁業）」を織り交ぜながら生業を組み立てている世帯が存在する。乙浜の住民たちは、「オカシゴト」と「ハマシゴト」とに携わる世帯のことを「両テンビン」世帯と呼ぶ。刺し網や潜水漁を行なうときは「ハマ」に出て、水稻や花栽培のときは「オカ」に向う。彼らの生業活動は「ハマ」と「オカ」がワンセットで

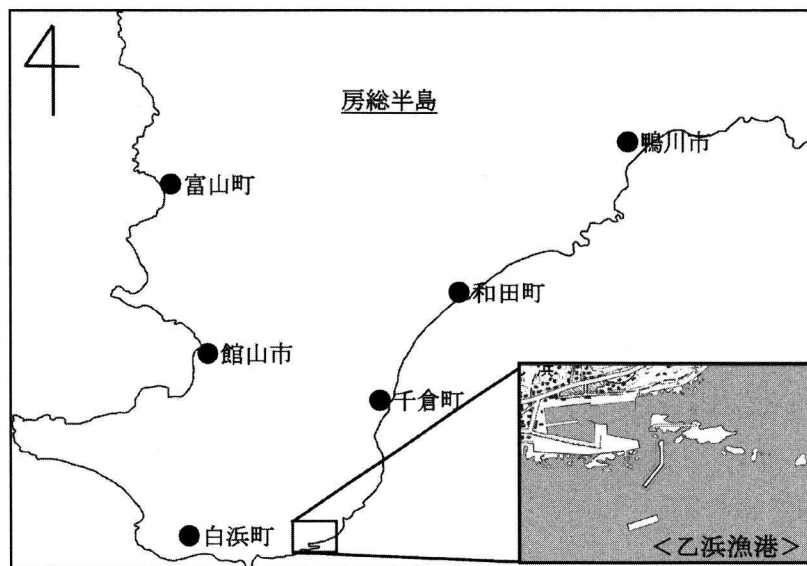


図 1 白浜町乙浜の位置

あり、昔からこれを意識的に行なってきた。

乙浜集落のなかには、そのほかに漁業専門の者を「ハマイッポウ」といい、農業専門の者を「オカイッポウ」という。「ハマイッポウ」は、年間を通して、アワビやサザエの潜水漁、イセエビやヒラメの刺し網漁、一本釣漁や見突き漁といった漁に関わりながら生計を立てている。一方、「オカイッポウ」は、センニチコウやハマナデシコといった夏花からキンセンカやキンギョソウなどの冬花、水稻、自家用野菜の栽培を行なっている。

表1は、乙浜の漁師会21人の生業選択リストである。漁師会に加入しているとはいえ、漁撈以外にもさまざまな生業に携わっていることが分かる。そのなかで現在、乙浜において「ハマシゴト」と「オカシゴト」とを組み合わせる「両テンビン」世帯が7世帯ある。それ以外の14世帯は「ハマイッポウ」ということになる。

「両テンビン」といわれる7世帯はすべて「ハマシゴト」で刺し網漁を行なっており、「オカシゴト」では花卉栽培を行なっている。「ハマイッポウ」の世帯の中でも、「オカ」でキンセンカ栽培や自家用野菜、主に「オツカイモノ（贈与）」用の落花生などを栽培している世帯もあるが、すくなくとも「ハマ」で刺し網漁を行ない、「オカ」で「ウリモノ」の花栽培を行っていないと「両テンビン」といわれない。事実、「ハマイッポウ」のなかでも識別番号13は、キンセンカ栽培を行なっているが、その出荷量が少ないため「両テンビン」とは呼ばれていない。

「両テンビン」世帯のなかで新規世帯は識別番号2のみである。「両テンビン」を行なうには、季節に合わせて「ハマ」と「オカ」を組み合わせなければならない。とりわけ「オカ」では「ウリモノ（換金用）」の花栽培で採算が取れるだけの耕地を所有していなければならない。また「ハマ」では刺し網漁の漁場や投網方法、修理方法を熟知していなければならない。必然的に新規世帯では難しいのである。新規世帯の識別番号10、15、16は、いずれも「ハマシゴト」で釣漁や刺し網漁、客船に従事しているものの、「オカ」に耕地を持たないため「両テンビン」とはならない。

また乙浜の住民は、「ハマシゴト」で漁獲したものであれ、「オカシゴト」で収穫したものであれ、自家消費用のものを「クイモン」といい、換金用のものを「ウリモン」という。また盆や正月、講などのときに近所や親戚におくるものを「オツカイモノ」と言い分けている。たとえば、盆前には、刺し網漁や潜水漁で獲ったイセエビやアワビなどは、漁協に「ウリモン」として水揚げせず、帰省してくる親戚への「オツカイモノ」として家に持ち帰る姿が多くみられる。

## ②……………「ハマ」での生業活動

### 1 「ハマシゴト」の概要

乙浜では、専業にせよ兼業にせよ漁業に従事し船を所有しているものは漁師会への入会が義務づけられている。現在、乙浜漁師会は21人の加入があり、アワビの稚貝の放流や魚礁づくり、タイやヒラメの養殖などを共同で行なっている。

乙浜地区を含む白浜漁協共同組合が所有する共同漁業権は、共第35号漁業権、共第36号第一種と共第34号第一種である。潜水漁は共36号の第一種で、ハバノリ、ワカメ、サザエ、イセエビな

表1 乙浜漁師会会員の生業選択一覧

識別 番号	漁船名	世帯構成	所有船数	生 業 一 覧	
				「ハマシゴト」	「オカシゴト」
1	宝幸丸	世+妻+若夫婦 +孫	テンマ×1	刺し網漁, 海女(フナアマ)	花栽培(キンセンカ), 水稲, 自 家用野菜(ラッカセイ他)
2	清吉丸	世+妻	テンマ×1	刺し網漁	花栽培(キンセンカ), 自家用野 菜(ラッカセイ他)
3	鈴丸	世+妻	テンマ×1, チャカ×1	一本釣り漁, 刺し網漁	花栽培(キンセンカ), 水稲, 自 家用野菜(ラッカセイ他)
4	三千丸	世+妻+母	テンマ×1, 釣船×1	一本釣り漁, 刺し網漁, 海女(オ カアマ), 客船	花栽培(キンセンカ), 自家用野 菜(ラッカセイ他)
5	源平丸	世+妻+子供二 人	テンマ×2	刺し網漁, 海士(フナアマ)	花栽培(キンセンカ), 水稲, 自 家用野菜(ラッカセイ他)
6	信栄丸	世+妻+若夫婦 +孫	テンマ×1, 釣船×1	刺し網漁, 海女(オカアマ), 客 船	花栽培(キンセンカ), 自家用野 菜(ラッカセイ他)
7	泉丸	世+妻	テンマ×2, チャカ×1	刺し網漁, 海女(オカアマ)	花栽培(キンセンカ), 自家用野 菜(ラッカセイ他)
8	弁天丸	世+妻+若夫婦 +孫	釣船×1	一本釣り漁, 客船	花栽培(キンセンカ), 自家用野 菜(ラッカセイ他)
9	広根丸	世+妻	テンマ×1, 釣船×1	一本釣り漁, 客船, 海士(フナア マ)	民宿
10	一美丸	世+妻	テンマ×1, チャカ×2	一本釣り漁, 刺し網漁, 客船	自家用野菜(ラッカセイ他)
11	久美丸	世+母	テンマ×2, 釣船×1	一本釣り漁, 海士(フナアマ)	自家用野菜(ラッカセイ他)
12	弥治丸	世+妻+若夫婦	テンマ×1	刺し網漁	自家用野菜(ラッカセイ他)
13	松丸	世+妻+若夫婦 +孫三人	テンマ×1	刺し網漁	花栽培(キンセンカ少々), 自家 用野菜(ラッカセイ他)
14	祥丸	世+妻	テンマ×2, 釣船×1	一本釣り漁, 刺し網漁, 客船	釣具屋
15	丸広丸	世+父+母	テンマ×2	刺し網漁, 海士(フナアマ)	釣具屋
16	恵津丸	世+妻	釣船×1	客船	
17	盛正丸	世+妻	テンマ×1	刺し網漁	
18	しまや丸	世+妻	釣船×2	客船	
19	富丸	世+妻	テンマ×1	刺し網漁	
20	清丸	世+妻+若夫婦	釣船×1	客船	花栽培(キンセンカ), 自家用野 菜(ラッカセイ他)
21	岡田屋丸	世+妻	テンマ×1, 釣船×1	網漁, 海士(フナアマ), 客船	花栽培(キンセンカ), 自家用野 菜(ラッカセイ他)

補注；濃色部分の世帯（識別番号1～7）が「両テンビン」世帯である。

漁船は、「テンマ」船が1～2tで主に刺し網漁、「チャカ」は4～6tで沖合の一本釣り漁に使用する。

釣船は、一本釣り漁もしくは客船として利用する。

どが漁獲対象物となる。漁具や漁法は、例えばアワビは素もぐり漁法に限られ、漁具はコノミ（岩盤に付着したアワビなどをとる小型の漁具）を含むイソガネだけである。サザエは、素もぐり漁と刺し網漁法が許可されている。刺し網は、網糸の太さ3号以下、一隻あたりの投網数も50反が上限である。イセエビは、目の付け根から尾端まで13cm以下のものは水揚げが禁止されているなどの漁業権行使規則が定められている。

1999年度の乙浜漁協全体の水揚げは、総漁獲高が5907万円であり、そのなかの87%にあたる5155万円が磯根漁での水揚げであり、残りの751万円が沖合の釣漁での水揚げである。磯根では、イセエビの刺し網やアワビ、サザエなどの潜水漁が主に行なわれている。磯根漁のなかでは、アワビが2062万円で磯根漁漁獲高全体の40%を占め、イセエビは1810万円で全体の35%を占めている。

そのほか、ブリ（イナダ・ワラサ）、ヒラマサ、カンパチを沖合の釣漁で狙うほか、冬期に刺し網漁でヒラメなどを狙う。漁獲される魚類のなかでは、ヒラメが430万円で最も多く、そのほかヒラマサやカンパチなどが多い。

乙浜集落の中央には、大型船舶の避難も可能な第4種漁港がある。乙浜漁港には、小型船の「テンマ」から中型船の「チャカ」、大型の釣り船まで計61隻が常時停泊している。「テンマ」船は、総重量1～2tであり主にエビ刺し網漁の投網や回収作業、また「オカズトリ（自家消費用）」の釣り漁などに使用される。一方、「チャカ」は、総重量が4～5tであり、主に沖口の広根やゲンジ根などの一本釣り漁に使用される。

漁師たちの潮流や風向についての知識をみておく。乙浜の漁師たちは、マシオ（東流）、サカシオ（西流）、コミシオ（北流）、デシオ（南流）の四方向からの潮流を認識している。また潮の流れには、上層と下層で潮流の方向が違ふときがあり、そのときは「二枚ジオ」や「三枚ジオ」などという。潮の流れが緩やかになることを「シオはタルム」または「シオツタレ」といい、潮の流れが止まった状態のことを「シオバテ」という。また潮が茶色がかかり見通しのきかない潮のことを「トワリッシオ」といい、深場での潜水漁ができない。また、海底付近の潮流のことを「ソコシオ」と呼び、「ソコシオがしている」とは、海底の潮流が激しいことである。

また風向とそれに応じた天候の変化にも敏感である。1年を通じて「イナダ（東風）」には注意をはらう。とりわけ8月にこの風が吹くと必ず時化になり、刺し網の揚網ができなくなるからである。また、秋口に吹く「サガ（北西風）」は、水温がさがり、イセエビの漁獲が減少するため、「ハマシゴト」から「オヤシゴト」へ移行することを意味している。「サガ」が春先に吹いている頃は、まだ潮が冷たいためエビの漁獲は思わしくないと認識されている。

## 2 刺し網漁

### a) 刺し網漁の投網と回収作業

刺し網漁は、6、7月の禁漁期間以外に操業される。乙浜では、4:00 p.m.に投網し、翌朝3:00 a.m.に回収することが決められている。とくに夏場は、海女たちが潜水する海域と刺し網を投網する海域が重複しているため、海女全員「イソアガリ（海からあがったこと）」を確認したあとに出漁する。最盛期は「デエビの時期（禁漁期間明け8月始めの4～5日間）」であり、この期間の

エビは「ツブ（体長）」が大きいので、普段「オカ（農業）」に力を入れている者や潜水漁の者も刺し網漁に参加する。ただ、「出エビ」時期を過ぎると漁獲量も横ばいになるため、出漁者数も減少する。

乙浜と塩浦のイセエビ刺し網漁師たちは、乙浜漁港沖約 200 m の地点にある浮標周辺で決められた投網時間まで待機する。そして規定時間に、イセエビ刺網委員が挙げる赤い旗を合図に投網を開始するという方式を採用している。また、乙浜と塩浦の漁師たちは、乱獲を未然に防ぐため、一日の投網数を上限 50 反と決めている。ただ投網数を逐次数えるわけでもなく、いわば各個人の意識にまかされている。出荷するサイズにも規制がある。イセエビの目の付け根から尾の先端までが 13cm 以上、サザエの場合は高さが 8 cm 以上なら出荷可能である。それ以下のものは、原則として海に戻さなければいけない。

イセエビの刺し網は、縦が 5 尺（約 7.5 m）、網目 2 寸 4 分（約 7.2 cm）のナイロン製の網に、下側は鉛の錘をつけ、上側には合成樹脂の「アバ（浮き）」をつける。網の両端には浮きのついた紐をつけ、仕掛ける地点の水深に合わせて紐の長さをかえる。一方、サザエの刺し網は、網目が 3 寸（約 9 cm）から 3 寸 1 分（約 9.3 cm）で、エビ網より太いテグス糸と重い錘を使用しているため、刺し網漁師にとって重労働となる。

イセエビ刺し網漁の投網から回収までの一連の手順は次の通りである。

刺し網漁師たちは、2:30 a.m.には漁港に集合し、刺し網回収作業が始まる 3:00 a.m.を待つ。大よそ 2:50 a.m.頃になると出漁し、網の回収作業に従事する。同時に漁師の妻たちも作業場の掃除や道具の整理といった回収作業の準備を行なう。

回収された刺し網は作業場まで運び、まず「ウリモノ」であるイセエビを外す。エビの尾を上に向け、腹を手前側に向けた状態にして「ハズシ」と呼ばれる道具を用いて、イセエビの体に絡まった網をずらしていく。足のとれたエビや弱ったエビは単価が下がるため、この作業は慎重に行なう。そのあとサザエやアワビなどの魚介類を外す。

イセエビを外した網は、束ねて作業場の壁に吊るし、海藻や魚介類などを外す。とりわけ時化の後には、カジメやテングサといった海藻が網一面に付着し、回収作業が長くなる。一連の仕分け作業が終わるとイセエビの体長を計る。12cm 以上の「ウリモノ」とそれ以下の「ハケ（規定に達しない漁獲物）」に分け、「ウリモノ」をプラスチック製の生簀に入れ替えて海中で生かしておく。

刺し網漁師たちは、8:00 a.m.に漁協に水揚げを行ったあと、2:00 p.m.頃まで刺し網の修理を行う。おおよそ投網の 2 時間前になると、修理作業を一段落つけ、今夕の投網の準備を始める。

投網開始 15 分前になると指定された待機場所に船を進める。4:00 p.m.になると刺網委員が赤い旗を挙げ、投網活動の開始を告げると、全船が一斉に全速力で漁場に向かう。投網活動は、おおよそ 20 分間で終了する。その後は、各々の家に帰り、翌朝の揚網作業に備える。この作業を刺し網が休漁となる日曜日以外、毎日繰り返すのである。

最盛期の「出エビ」の頃は、仕掛ける網数が 50 反もあるため、長時間の作業を余儀なくされる。そのため、親類や知人に有給でエビ網の回収作業を手伝ってもらう世帯が多い。手伝い人には、仕分け作業の終了後に朝食を振舞い、エビ網にかかってきたブダイやカサゴなどを「オツカイモノ」として渡す。手伝い人のなかには、手間賃ではなく刺し網にかかってくる魚介類だけをもらうもの

もいる。

## b) 日々の投網活動とその用途

著者は、刺し網漁師の日々の漁獲行動を分析するため、刺し網漁師A氏の漁船に携帯型GPS装置を取り付け、投網軌道データを収集するとともに、漁船に同乗し投網される網数や投網順序、投網理由を記録した。

刺し網漁師の投網場所と投網理由をまとめたものが図2a～pである。<sup>(5)</sup> 図中の矢印先が投網場所であり、図中の記号は、たとえば、①前日の漁獲<sup>(8)</sup>であれば、「前日の漁獲状況」を根拠に、その日の1番目に刺し網を8反投網したことを意味している。また、8月2日はエビ網解禁日であり、昨年度の解禁日の漁獲状態を考慮しながら投網活動を行っている。この投網活動については2—c)で考察する。

イセエビ刺し網漁では、イセエビ以外にもさまざまな魚が混獲（目的魚種以外の魚類が漁獲）される。表2は、刺し網で混獲される魚介類とその方名を示したものである。<sup>(6)</sup> とりわけ4、5月の水温が冷たいときは、エーゴやコチ、メジナなどが刺し網に掛かり、一方、8、9月の水温が温かいときは、カサゴやイサキ、ブダイ、ゾウリ、カワハギなどが掛かる。

そして乙浜では、混獲された魚介類を親類や知人に送るための品物「オツカイモノ」としたり、自家消費用の「クイモノ」とする習慣がある。表3は、2000年8月3日から30日までのイセエビ刺し網漁におけるエビ・サザエ以外の漁獲物とその用途を示している。<sup>(7)</sup> 図中の◎は、「オツカイモノ」として知人や刺し網漁を手伝いにきた人に渡したものであり、◆は自家消費用「クイモノ」として自宅に持ち帰ったものである。無記号なものは、「ダモノ」として捨てられたものである。

「オツカイモノ」として用いられるのは、主に解禁日直後と盆前であることがわかる。解禁日直後の8月3日から5日までは、投網数が多いため、知人に刺し網の回収作業を手伝ってもらふ。その際、手間賃を支払うが、その他に刺し網にかかってきた魚介類を「オツカイモノ」として渡すのである。イセエビの回収作業を手伝う人のなかには、手間賃を受け取らずに刺し網にかかる魚介類だけを「オツカイモノ」としてもらふひともいる。また、盆前には、遠方の親類や友人のために混獲された魚介類のなかで程度のよいものを送るのである。

一方、刺し網漁が行なわれた日には、ほぼ何かが「クイモノ」として消費されていることが分かる。解禁日直後は、「オツカイモノ」としての用途が優先されるため「クイモノ」は少ないが、それ以後は毎日1～3匹の魚介類をもち帰っている。魚類の腐敗状態にもよるが、カワハギやカサゴやメジナなどが獲れると必ず「クイモノ」として持ちかえる。これらは、主に刺身や揚げ物にして消費される。また、8月25日は、「クイモノ」用の魚を狙って沖合に刺し網を投網しているという例もある。「ダモノ」は、魚体の小さいもの、また腐敗のすすんだものが該当するが、そのほか昨日や一昨日に「クイモノ」として消費して「飽きてしまった」ものも「ダモノ」となる。

表4は、イセエビ刺し網漁で混獲された魚介類に対する用途別の割合を示している。<sup>(8)</sup> 調査期間中に刺し網で混獲された魚介類のうち、「オツカイモノ」が約15%、「クイモノ」が約16%であることから、消費のされ方は異なるものの、消費量はお互いほぼ同量である。そのなかで、「オツカイモノ」は、ブダイやメバル、メジナ、カレイといった魚類が解禁日直後と盆前にまとめて消費さ



れ、一方、「クイモノ」は、連日の漁獲物のなかで腐敗がなく程度のよいカワハギやカサゴ、メジナといった魚類が消費されている。

このように、刺し網漁での漁獲物であるイセエビやサザエが換金される「ウリモン」だけでなく、親類や知人に送るための「オツカイモノ」として残されている。また、刺し網漁で獲れたイセエビ・サザエ以外の漁獲物も必要に応じて「オツカイモノ」または自家消費用の「クイモノ」として消費されている。

### c) 刺し網の投網戦略を規定する要因

イセエビ刺し網漁師の漁獲行動を調査した結果、彼らが日々の投網活動でとりわけ重要視している要因を明らかにすることができた。その結果は次の点に要約される。①ほかの漁師の漁獲状況を参考にしながら、前日または前回の自らの漁獲量の多い地点には優先的に投網する、②風波の規模と水温の変動、月齢に対応した地点を選定する、③海流の影響から刺し網に海藻類が付着する地点への投網を回避する、④刺し網漁師間の「ナワバリ」を考慮する、という大きく4点あり、その日の海況に関する情報は、昼間に同地点を潜水している海女たちの意見を取り入れている。そのほか「クイモン」もしくは「オツカイモン」となるアオリイカやカンパチといった魚類を狙うため出漁した事例もある。むろん、上記の要因は複合的に絡み合っている場合もあるが、今回の調査では漁場を選択する際の最大の理由を聞き取っている。以下では、投網作業の際に重要視する各々の要因をみる。

#### ①前回の漁獲量の多寡

まず、彼らは前日もしくは前回の漁獲量にことさら敏感であり、とりわけ自身の漁獲がよかった地点は、ほぼ例外なく次回も投網している。たとえば8月3日(図2b)は、8月2日の操業で消波堤の沖口と浅瀬の漁獲がよかったため、引き続きその地点に投網している。また8月7日(図2d)から10日(図2g)、21日(図2k)から25日(図2n)にかけては、消波堤の沖口周辺が好漁であったため連日その地点に優先的に投網している。

ほかの漁師が大漁した地点は、漁師どうしの会話で出てくることが多い。彼らは、その地点にも投網することを考える。しかし、この場合、ほかの漁師もその地点を第一投網場所に選定していることが多いため、無理な競争を避け、その地点を避けることも少なくない。それはすでにその漁場周辺を得意とする漁師が多くおり、投網する場所がなくなることがあり、また、その漁場に関する自身の知識も不明確であるため、漁獲効率が下がる可能性があるからだ。たとえば、8月18日(図2j)は、ほかの漁師が投石場で大漁したとの情報が入ったが、その地点の自身の知識が曖昧なことから、多くの漁師が投網することを考慮し意識的に避けている。また、漁師どうしの会話は、「漁獲に対し過大・過少している者もいるのでそのまま鵜のみにしはしない」という。あくまでもほかの漁師の漁獲は参考程度にして、自身の昨日の漁獲を勘案して投網場所を選定しているのである。

#### ②風波・水温・月齢の影響

漁場の自然現象に関しては、まず風波の規模が重要となる。とりわけ台風の影響で波が高くなると、イセエビは群れをなして沖に移動するといわれており、その群れをいわば一網打尽にすべく沖口に集中的に投網する。沖方向へ逃げていくイセエビを狙って投網した8月4日(図2c)や台風

図2 イセエビ刺し網漁師の投網軌道図 a～p

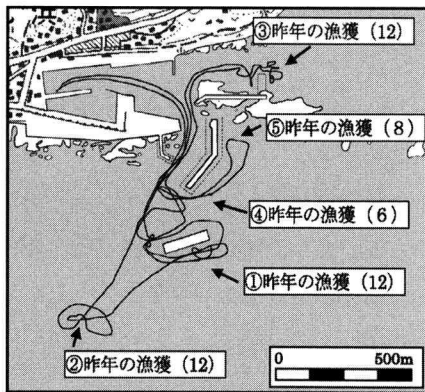


図2a 8月2日(解禁日)刺し網投網軌道図

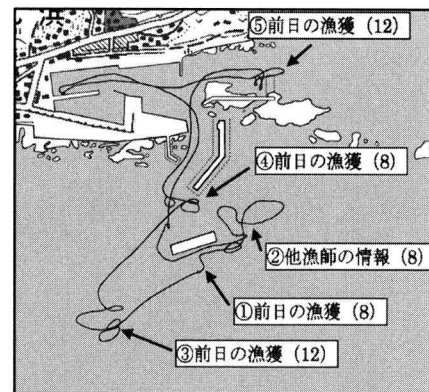


図2b 8月3日軌道図

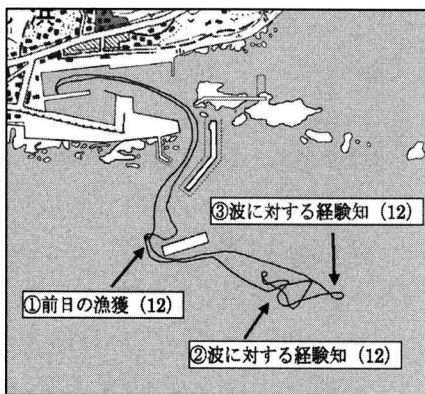


図2c 8月4日軌道図

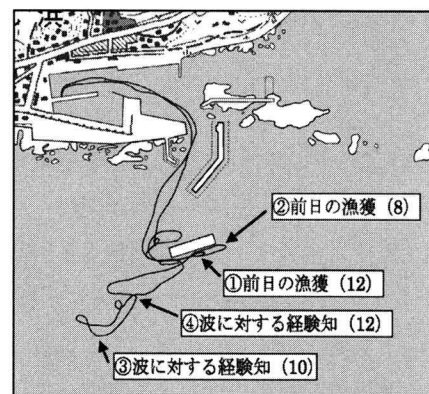


図2d 8月7日軌道図

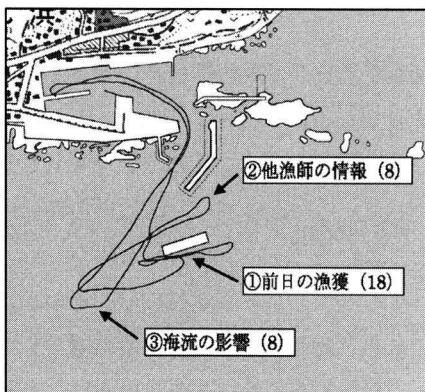


図2e 8月8日軌道図

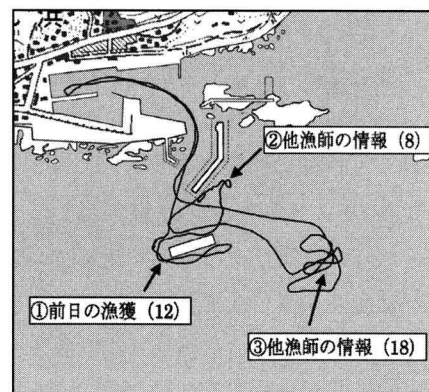


図2f 8月9日軌道図

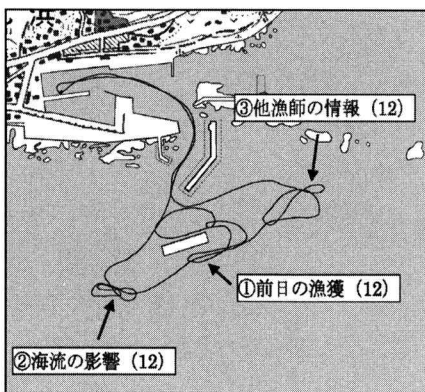


図2g 8月10日軌道図

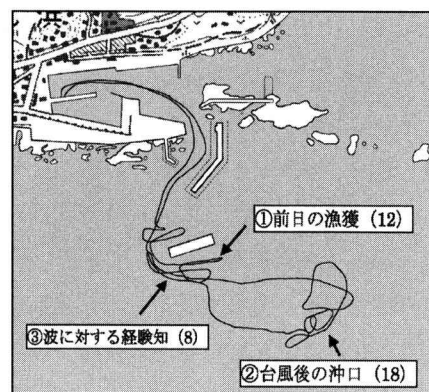


図2h 8月16日軌道図

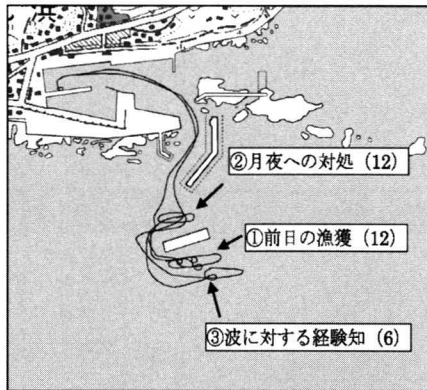


図 2 i 8月17日軌道図

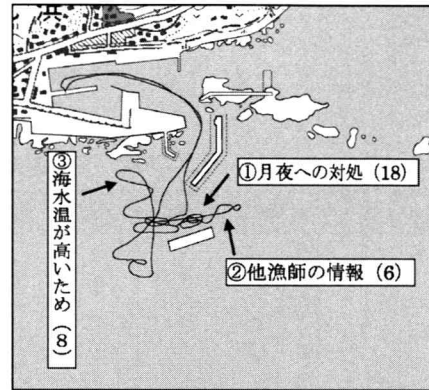


図 2 j 8月18日軌道図

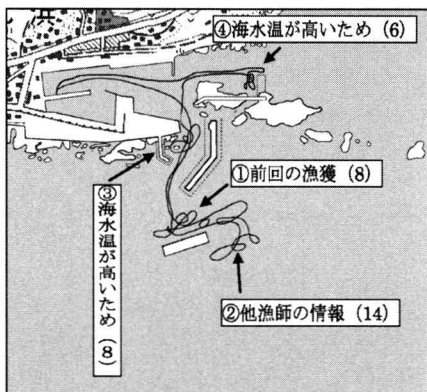


図 2 k 8月21日軌道図

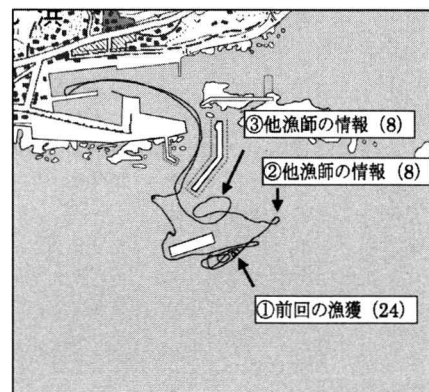


図 2 l 8月23日軌道図

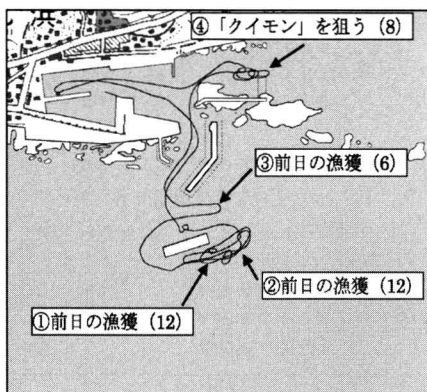


図 2 m 8月24日軌道図

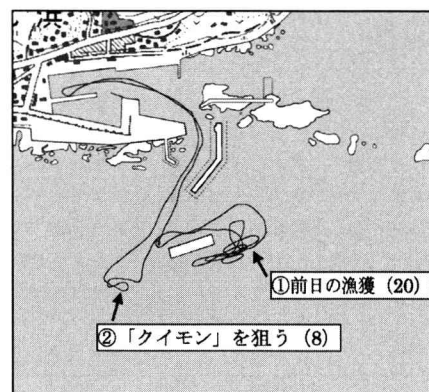


図 2 n 8月25日軌道図

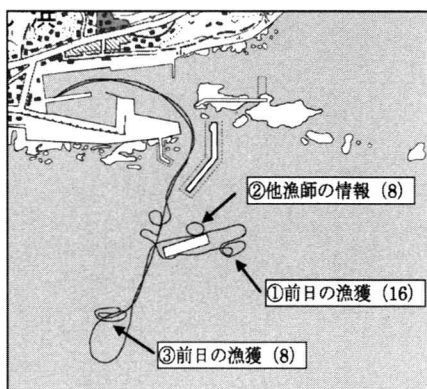


図 2 o 8月28日軌道図

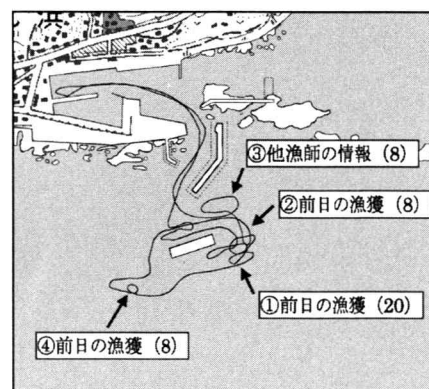


図 2 p 8月29日軌道図

表2 刺し網漁で混獲される魚介類一覧

科名	和名	方名	科名	和名	方名
アイゴ科	アイゴ	エーゴ	ハコフグ科	ハコフグ	ハコフグ
アジ科	ブリ	ブリ	ハリセンボン科	ハリセンボン	ハリセンボン
	マアジ	アジ	ハタ科	スズキ	スズキ
	カンパチ	カンパチ		クエ	クエ
	ヒラマサ	ヒラマサ	ハモ科	ハモ	ハモ
アカノコウオ科	アカノコウオ	クマダイ	ヒラメ科	ヒラメ	ヒラメ
アナジャコ科	アナジャコ	ジャコ	ヒメジ科	オジサン	
アナゴ科	マアナゴ	アナゴ	ブダイ科	ブダイ	ブダイ
イタチウオ科	イタチウオ	イタチ		アオブダイ	アオブダイ
イシダイ科	イシダイ	イシダイ	ベラ科	ニシキベラ	アータゴ
イサキ科	イサキ	イサキ	ボラ科	ボラ	ボラ
	コショウダイ	コショウダイ	マツカサウオ科	マツカサウオ	
ウシノシタ科	クロウシノシタ	ゾウリ	マダコ科	マダコ	タコ
	アカシタビラメ		マフグ科	アカメフグ	フグ
ウツボ科	ウツボ	ナマダ		トラフグ	フグ
	トラウツボ	アズキナマダ		ウチワエイ	エイ
ウミタナゴ科	ウミタナゴ	タナゴ	その他		
カサゴ科	ミノカサゴ	オコゼ	アマオブネガイ科	フトスジアマガイ	ペーチョコ
	メバル	メバル	アッカガイ科	イボニシ	カレイボ
	カサゴ	カサゴ	アメフラシ科	アメフラシ	ウシ
カワハギ科	カワハギ	カワハギ	アルバシア科	アズマウニ	
カレイ科	アブラカレイ	カレイ	イワガニ科	ショウジンガニ	イソッピ
カマス科	アカカマス	カマス	イソガニ科	イソガニ	イソガニ
	ヤマトカマス	カマス	ウチワエビ科	セミエビ	セミエビ
コチ科	コチ	コチ	オオバフンウニ科	バフンウニ	マグソッカデ
コノシロ科	コノシロ	コノシロ		サザエ	サザエ・ゲンコツ
ジントウイカ科	アオリイカ	アオリイカ	ミミガイ科	クロアワビ	クロ
スミヤキ科	アブラムツソコ	アブラ		メガイアワビ	メカ・アカ
タカノハダイ科	タカノハダイ	タカッパ		トコブシ	トコブシ
チョオチョオウオ科	トゲチョオチョオウオ	チョオチョオウオ	メジナ科	メジナ	メジナ
トビウオ科	トビウオ	トビウオ	ナカウニ科	ムラサキウニ	カデ
トオゴロイワシ科	トオゴロイワシ	トオゴロ	ニシキウズガイ科	チグサガイ	アメイボ
ニザダイ科	ニザダイ	サンノジ		バイテラ	シッタカ

表3 刺し網漁におけるエビ・サザエ以外の漁獲物とその用途

日	8月3日	8月4日	8月5日	8月8日	8月9日	8月10日	8月11日	8月17日
エビ以外の漁獲物	◎ブダイ (2/4)	◎メジナ (1/1)	◎ブダイ (1/1)	エーゴ 1	◆カサゴ (1/1)	◎カワハギ (1/1)	◎カワハギ (2/2)	イタチ 1
	◎メバル (1/1)	◎カワハギ (1/1)	◎メバル (1/1)	カサゴ 1	タカッパ 6	◆ゾウリ (1/1)	◆カサゴ (2/2)	カサゴ 4
	◎メジナ (2/4)	◎カレイ (1/1)	◎カワハギ (1/1)	イサキ 1		エーゴ 1	タカッパ 3	エーゴ 1
	◆カサゴ (1/1)	サンノジ 1	◎イサキ (4/7)			タカッパ 4	エーゴ 1	タカッパ 1
	サンノジ 1	タカッパ 4	◆カサゴ (1/1)			カサゴ 3	ブダイ 1	サメ 1
	エーゴ 1		オコゼ 3			エイ 1		
	タカッパ 3		サンノジ 1					
エイ 1								

8月18日	8月19日	8月22日	8月24日	8月25日	8月26日	8月29日	8月30日
◆メジナ (1/1)	◆メジナ (1/1)	◆メジナ (1/1)	◆カワハギ (1/1)	◆スズキ (1/1)	◆カワハギ (2/3)	◆ブダイ (1/1)	タカッパ 3
◆カンパチ (1/1)	タカッパ 2	◆カワハギ (1/1)	カサゴ 3	タカッパ 2	サンノジ 1	◆カンパチ (2/2)	
◆カサゴ (1/1)		エーゴ 2	タカッパ 2	エーゴ 2	フグ 1	タカッパ 1	
コショウダイ 1		ハリセンボン 1			タカッパ 2	メジナ 1	
タカッパ 3		タカッパ 1			イタチ 1		
		エイ 1					

表中記号 ◎;「オツカイモノ (贈物)」, ◆;「クイモノ (自家消費用)」, 記号なし;「ダモン (不用なもの)」

通過後に沖から灘方向に戻ってくるイセエビを狙って投網した8月16日(図2h)などがそれにあたる。「移動しているイセエビは群れているため、掛かれば一度に大漁する場合がある」という。こうした知識は、漁師全体で共有されている。

ただ翌日の風波の規模を考慮し回収しやすい地点に投網する。とりわけ消波堤の周辺に投網するときは、翌日の波の向きには注意を要する。消波堤付近に投網すると、波の向きが変わった場合、網が消波堤のなかに入ってしまう、揚網作業の際に危険が生じる。そのため彼らは、翌

朝の波の向きを考慮して消波堤と刺し網との間隔を決めるのである。8月16日(図2h)は、「ミナミ(南からの風)」が強く吹いており、消波堤からの間隔を普段より10mほど離している例がある。

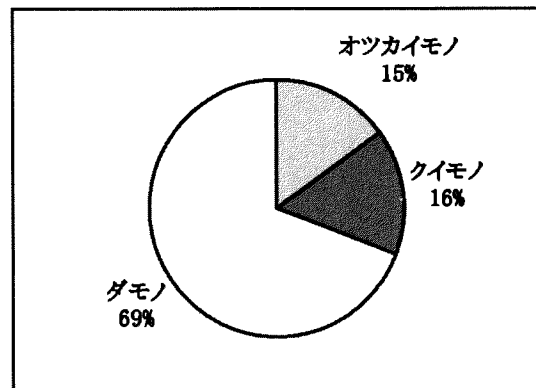
また月齢によっても投網する地点を変更する。通常、月夜ではイセエビの漁獲量が減少するため刺し網漁師たちは休漁する場合が多い。それは、「月夜の不漁の理由は、月の明るさによって、エビが網目に気づくから」[原子 1972:96]であるという。しかし、乙浜のイセエビ刺し網漁師たちは、月夜の時、「海藻の生えているところに網を入れるとイセエビは網が分からない」といい、海藻が群生している地点に刺し網を投網する。こうすることで月夜での漁獲量の減少は防げるという。月夜の8月17日(図2i)や18日(図2j)は、消波堤灘口のカジメ類の海藻が群生している地点に投網している。

海水温の変動が少ないときは浅瀬でも大漁が期待できる。逆に、前日より海水温が下がると浅瀬はすぐに冷えてしまうため、イセエビの活性が悪くなり漁獲量は減少する。漁場名でいうと「ハサイ」や「ママノテトラ」周辺がそれにあたる。一方、「アカベカ周辺」や「消波堤」「投石場」などは水深があるため水温が急激に変動しにくい。ただ水温の低い状況が2、3日続くと普段どおりの漁獲量に戻る。8月18日(図2j)や21日(図2k)は、海水温の高い状態が続いたため浅瀬に投網している。

### ③ゴミの影響

刺し網漁師たちは単にイセエビの獲れる地点を考慮するのではなく、海流などの影響で海藻類などのゴミが密集する地点への投網を避けている。海藻類が大量に付着した網を修理するには、時間と人手を浪費することになるからである。乙浜の場合、「ソコシオ」が強いと消波堤の内側にゴミが溜まり、また波が高いと浅瀬の「コノジ」や「ハサイ」に切れた海藻類などのゴミが集まる。風波の大きさは陸上の作業場から見てとり、「ソコシオ」の状況は昼間に潜水している海女たちの意見を参考にする。例えば、8月23日(図2l)には「ソコシオがきつい(海底の潮の動きが強い)」ため海藻類、とくに切れたカジメの根が密集する「コノジ」への投網を避ける例や、8月29日(図2p)には「オオグチ」方向への投網を避けている例がある。このように刺し網漁師は、海況によっ

表4 刺し網漁で混獲された全魚介数  
に対する用途別の割合



て刻一刻と変化するゴミの密集場所にも敏感でなければならない。

#### ④個々人が得意な漁場

乙浜周辺の漁場には、漁師個々人が得意とする地点が多くある。刺し網は、基本的にどこに投網しても良い。しかし、「昼間は岩礁やテトラの周辺に身を隠し、夜間にそこから出て捕食行動をする」というイセエビの習性上、必然的に好漁場は限られてくる。漁業者は、限られた漁場のなかで、いくつかの得意とする漁場を持っている。必ずしも、全員が個々の得意とする地点を持っているわけではない。しかし、ほとんどの漁師はいくつかの得意とする漁場を持っており、そうした漁場は漁師間で共通理解している。

普段は他人が得意とする地点を意識しながら、自らが良く知る漁場の投網を第一に考える。それは、「得意とする地点以外に投網しても、その地点を得意とする漁師によってすでに多くの網が投網されていたり、また漁場に対する知識も正確ではないので大漁できない」という。例えば、8月23日（図21）は、海水温が高い状態であったが、浅瀬付近を得意とする漁師が既に出漁していたため、「ハサイ」や「コノジ」への投網を控えている事例がある。こういった共通理解があることで、各漁師が漁場を使い分けているともいえる。このように刺し網漁師たちは、その日の気象や海洋現象に加え、個々人が得意とする漁場を強く意識しながら投網場所を選択しているのである。

#### d) 刺し網漁の漁獲技術

刺し網漁師たちは、こうした要因を勘案しながら日々の投網活動を行う。そして、その日の「潮流」や「風波」といった海況に関する情報は、当日午後3時に「イソアガリ（操業活動を終え、海女小屋に戻ってくること）」してくる海女から取り入れる。この情報は、先ほどまで潜っていた海女たちが身をもって体感したことなので、最新で正確である。そのため刺し網漁師たちは、この情報を重要視しながら投網場所を考える。

潜水を終えた海女たちは、刺し網漁師たちに「ソコシオがしている（海底の潮の流れがはやい）」とか、「ソコシオがない」とか、また「ヒヤッケイ（海水温がひくい）」や「デシオ（灘から沖へ潮が流れている）」「イリジオ（沖から灘に潮が流れている）」という情報を伝える。ここで得た情報は、各個人の投網戦略の布石を築く。著者の調査では、海女から提供された情報が1人の漁師に伝えられた場合、ほかの漁師に過大・過少は言っていない。昼間に同海域を潜水している海女から意見を積極的に取り入れ、最新の情報を漁師間で共有しているのである。

実際、8月8日や10日をみると、A氏は海女たちが伝えてきた「ソコシオがしている」という情報をもとに、好漁が期待できる消波堤の南西側の沖口に投網している。また、8月24日は「ソコシオがしている」ため、海藻類が溜まる「コノジ」などへの投網を避けている。ほかにも、「ヒヤッケイ（海水温がひくい）」と伝えられた場合、海水温が急激に下がらない水深の深い地点に投網したり、風波が強い場合には、投網や揚網する危険性とイセエビが大漁する見込みとを秤にかけ、「沖口に群れをなして逃げていく」イセエビを狙っている。

乙浜では、妻が海女である刺し網漁師が3人おり、漁師たちは投網前になると海女小屋に向いて潮の状況を聞く場合も多い。こうして海女から得た情報は、特定の個人のみが所有するものではなく、投網前に漁港に集まっている「両テンビン」世帯の漁師間で共有される。

このようにイセエビ刺し網漁では、集団内で情報や知識を共有し、意識的に漁場環境に対応していくことが多い。この場合の集団とは、情報が共有されている緩やかな領域と考えてよい。刺し網は、投網作業そのものが単純なものであり、また回収作業もネットホーラー（刺し網揚網機）を利用した単調なものである。いずれの作業も、とりたてて特殊な身体的技能は必要ない。それ以上に、気象や海洋などの漁場環境に漁獲が左右されるイセエビを狙うため、投網前の海況や気象に関する情報が重要な意味をもつ。彼らは、自らが好漁であった地点を投網場所の中心軸としながらも、こうした海況に関する情報を踏まえ、その日の投網数や投網ポイント、投網順序などの個人的な漁獲戦略を立てているのである。

### 3 潜水漁

乙浜には、現在、5人の「オトアマ（海士）」、6人の「オンナアマ（海女）」がいる。潜水漁の操業は、5月1日から9月10日までで、その期間内の6、7月はサザエのみ禁漁となる。主な漁獲物は、「クロ（クロアワビ）」「アカ（アカアワビ）」「トコブシ」「サザエ」「シツカ（バイガイ）」が「ウリモン」であり、「テングサ」「タコ」「カゼ（ウニ）」が「クイモン」もしくは「オツカイモン」になる。

乙浜のアマたちは、その技能や漁場への移動手段の相違によって「オトアマ」「ノセノセ」「オカアマ」の大きく三つのグループに分かれている<sup>(9)</sup>。

「オトアマ」とは、男性一人につき「イッパイ（一隻）」もち、船で港から漁場まで移動する者をいう。乙浜の「オトアマ」は、船上に小屋とイロリのある船で出漁し、操業中はガスコンロの火で採暖する。昼食時も帰港せず、波の低いところに移動して昼食を取る。乙浜の「オトアマ」は、ほとんどがカジコ役として妻を乗船させており、船上での漁獲物の仕分けや漁具の整理などの作業に従事する<sup>(10)</sup>。出港は朝9時頃であり、漁協の水揚げがある午後3時半まで海上で操業する。

「ノセノセ」とは、海女が一隻の船に数人乗りこみ、船頭である「カジコ」の運転で漁場に行く海女のことをいう。乙浜では、現在3人の海女がこの方法で操業している。「カジコ」は、海女たちを漁場に連れて行くだけでなく、海水温や潮の色、風向などを判断しその日の漁場選択に有効なアドバイスを行なう。最終的な漁場選択は海女が行なう。

「オカアマ」とは、海岸から自泳で漁場まで行く海女のことをいい、乙浜では現在3人いる。彼女らは、海女小屋から目的とする漁場の近くまで陸上を自転車で移動し、到着すると海岸から「ハマダル」を浮きかわりに泳ぎ出す。海岸沿いに群生するテングサや浅瀬にいるアワビ、サザエ、シツカが主な漁獲物である。風のときは比較的遠くまで行けるが、普段は岸から50 mぐらいの範囲で操業する。「オカアマ」の主な漁場は、乙浜漁港の沖にあるゼンベイ島周辺であり、その島には「オカアマ」専用の海女小屋を設置している。

また船などを使わず、海岸周辺に群生するテングサなどを歩きながらとる「オカバイ」もいる。「オカバイ」は、水中眼鏡だけをつけてテングサを刈り、腰にはテングサを入れるための網「コシダマリ」をつける。この「オカバイ」は、高齢の海女が行うことであり、獲ったものはすべて「クイモン」か「オツカイモノ」になる。

海女が出漁するのは10:00 a.m.頃であり、帰港は3:00 p.m.前後である。「オトアマ」のなか



には、3:30 p.m.に水揚げをした後、4:00 p.m.からイセエビ刺し網を投網するものもある。

潜水漁に従事している海女たちの典型的な1日をAさんの行動を例にみしてみる。

夫が刺し網漁をやっている海女たちは、5、8、9月の3ヶ月間、刺し網の回収作業を手伝うため2:30 a.m.頃に起床する。3:00 a.m.からはじまる回収作業は、大よそ7:00 a.m.で終了する。その後、10:00 a.m.からの潜水漁に備えて約30分ほどの休息を取る。9:30 a.m.になると、ほかの海女たちとともに海女小屋に集合する。また、「イソメー（磯仕事の前）」に畑に出て、野菜の収穫や草刈りなど行なうこともある。

海女小屋での雑談のなかで海況や天候などの情報を交換し、その日の漁場を選択する。白浜では、資源保護のために長時間潜水できるウエットスーツの着用が許可されていない。海女たちは、スポンジ製のパンツをはき、ナイロンシャツを上下にはおる。スポンジ製のパンツには浮力があるため、約1kgの錘つきベルトをつける。足にはナイロン製の靴下をはき、「イソメガネ」「ウキダル」「カツカネ」「コノミ」「ツイ石」を手に持ち、「カジコ」が待つ船に乗り込む。

海上での操業時間は、「ヒトオリ目（一回目）」が10:30 a.m.頃から12:00 a.m.までの約1時間半である。その後、海女小屋で消化のよい昼食をとり、囲炉裏の火で「セアブリ（囲炉裏に背を向けて、腰から首にかけて暖を入れる）」と「ハラアブリ（囲炉裏の角に寝そべて腹に暖を入れる）」の姿勢を繰り返しながら、冷えた身体に暖を入れる。彼女たちは、「もう一度体に火を入れてから」とか「一汗かいてから」というように、自分の身体と相談しながら「フタオリ目」の開始時間を決める。これは、昼食後、「体に火を入れる」ことを怠ると、「フタオリ目（二回目の潜水活動）」には体が動かなくなるからである。

「フタオリ目」の出漁は、大よそ1:30 p.m.であり、3:30 p.m.まで操業する。帰港すると、その日に獲ってきたアワビやサザエ、シリダカを仕分け、その日のうちに漁協に卸す。漁を終え海女小屋に帰ると、その日の海況を「ソコシオがしている（海底の潮流が激しい）」とか「ヒヤッケイ（冷たい）」という言葉で刺し網漁師たちに伝える。刺し網漁師たちは、この情報を参考にその日の投網場所を選定するのである。その後、着替えを終えると、天候が良ければ「イソアガリ（磯あがり）」に午後6時頃まで畑に行く。その後、翌日の刺し網回収作業に備えて8:30 p.m.頃就寝する。

これが「ノセノセ」で潜水漁を行なっているA氏の日である。

潜水漁の期間は、5月1日から9月10日までであり、「両テンビン」世帯の人々は、4月下旬までに田植え作業を済ましておくのが通例である。「ハマ」で潜りが始まると、「イソメー（磯前）」や「イソアガリ（磯の後）」に水田の除草や畑の施肥を行なうのである。

#### 4 一本釣漁

乙浜では、主に5～7月と10～11月にかけて沖合で釣り漁が行われ、ブリやカンパチ、ヒラマサなどが漁獲される。漁場は、乙浜漁港から沖合に約10kmの地点にあるヒロ根、キューゴ根、ゲンジ根である。これらは房総でも指折りの漁場であるため、乙浜の漁師だけでなく、白浜や布良、白間津、千倉の漁船や遊漁船がひしめき合う。

乙浜には、釣り漁に「カッチャクリ」漁、「カイテン」漁、「ヒコウキ」漁という特徴的な三つの漁法があり、海況に応じた漁法が選択される。彼らは、「一匹の魚を釣るのにいろいろなやり方が

ある」というように、それぞれの漁具を船の甲板下に数多く積んでおき、魚候や海洋現象の変化に応じて漁具を使い分ける。

操業中に漁法を変更する場合、彼らは、ほかの漁師の釣果をとりわけ参考にする。その際、自分やほかの漁師が何をどれだけ釣り上げたのかという情報を共有するため、船上において漁師同士が手信号を送り合う。

例えば、カンパチが釣れている場合、両手を漁師自身の頭の前から後ろに動かし、頭にハチマキを巻いているような動作をする。カンパチは、目から第一背鰭にかけて一本の黄色い筋が通っており、その筋がハチマキに見えるという。ハチマキを巻く両手の動作によって、カンパチを表現しているのである。またヒラマサの場合は、両手を平らにして上下でたたく。ヒラマサは、カンパチなどに比べて体幅が平たいため、その姿を手で表しているのである。

ブリやワラサ、イナダといった「アオモノ」は、両手の親指と人差し指で輪をつくる。「アオモノ」は一般に胴が丸いため、それを表現しているのである。その後、イナダの場合は、自分の胸の前で両手の間隔を30 cmほどあけ、ワラサは胸の幅ぐらいに両手広げ、ブリは胸の幅より広く80 cmぐらいの間隔を取る。

また釣り上げた魚数は、指を立てて知らせる。こうした漁師間の情報交換を踏まえながら、魚候に応じて三種類の漁法を使い分けているのである。ここでは、その三種類の漁法を見ておく。

#### i) 「カッチャクリ」漁

海底付近に群集している魚を狙う漁法に「カッチャクリ」漁法がある。乙浜では「カッチャクリ」漁法のことを「カワを流しに行く」ともいう。鉄の針にフグの皮を付けた「カワ」と呼ばれる擬似餌を微速で航行中の船の上から落とす。漁師は、テグスを握っている方の腕に前後の反復運動を繰り返し返し、餌に見立てた「カワ」に魚をおびきよせる。彼らは、腕に前後の反復運動を加えながら、同時に手首も前後に細かく動かす「カッチャクリ」という動きを行ない「カワ」に微妙な動きを演出する。イワシに見立てられた「カワ」の微妙な動きに魚食魚が食らいついてくるのである。

この漁法は、魚の習性や海底地形の状況、潮の動きといった経験に基づく自然知に加え、早朝から夕暮れまで「カッチャクリ」を行なえるだけの強靱な体力も必要とされる。

この漁法の釣果の多寡に強い影響を与えるのが、潮に応じた「カワ」の選択と海底地形の認識能力である。「カワ」に付いているフグの皮にも濃淡があり、潮の色に応じて「カワ」を交換する。濃い茶色の「カワ」は、「潮が良い（海の透明度が高い）」ときに使う。これは、海中で濃い色をした「カワ」がよく目立つためであるという。逆に、「潮が悪い（海の透明度が悪い）」ときは、白色の「カワ」を用いる。出漁する前は、漁師とおしの会話や昨日の潮の状況を手がかりに使用する「カワ」の色を決定する。また船上では、たえず潮の透明度を確認し「カワ」を取り替えている。

また漁師たちは、「カワ」を根周辺に流さなければいけないため、潮流の動きと海底地形、特に根の位置にも精通していなければならない。彼らは、海上に出ると「根のテッペン（頂上）」を陸地の山々の重なり具合から確認する。海上で同定した「根のテッペン」を原点に、「根のカミ（根の潮上部分）」に「カワ」を落とし、たえず潮の流れの逆方向に船を進める。海中の「カワ」が潮上に向かってるように見立てることがよいとされているからである。「カワ」を手繰り終わると、

船をもう一度「根のカミ」に進め、同様の作業を繰り返す。基本的に「根のカミ」に群集する魚を狙い、潮流の変化に応じてたえず船の進行方向をかえる。

## ii) 「ヒコウキ」漁

魚群が海面付近にいるときは「ヒコウキ」漁を行なう。これは、船の左右に竹製の「ハネ」を出し、その先に波きりを目的とした木製の「ヒコウキ」と擬似餌「ツノ」をつけ、低速で海面上をトロールする漁法である。「ハネ」先から「ヒコウキ」までの長さが約 70 m であり、「ヒコウキ」から約 6 ヒロ離して「ツノ」をつける。

漁港から出ると、海上に舞っている「クロ（ミズナギドリ）」や「カモメ」の群れを探し、その場所に船先を向ける。このことを「トリヤマを立てる」といい、海上での重要な視認行為である。鳥は、群れになって「ウワッカ（海面）」まで浮上したイワシやサンマを空中から狙っているのである。海面下には、ヒラマサやブリなどの魚食魚がイワシなどの小魚を捕食している。

漁師たちは、「トリヤマ」を発見しても絶えず微速で進む。これは、海面に群れている魚が、船のエンジン音とスクリューで作られる気泡を極端に嫌い、すぐに海中に潜ってしまうからである。「トリヤマ」が出れば、鳥の群れの真ん中を船で突き抜けるのが一番良いとされる。しかし、海上では、ほかの漁師も「トリヤマ」に向けて一気に船を進めるため、必ずしも「トリヤマ」の真ん中を通過できるわけではない。加えて、各船には左右の「ハネ」から 70 m 後ろに「ツノ」を流しながら海上を旋回しているため、それぞれの船があまり接近できない。彼らは、「トリヤマ」の規模と他の船の動向に常に注意をはらいながら自船を操縦する。

## iii) 「カイトン」漁

魚群が中層にいると考えられるときは「カイトン」漁を行なう。これは、「ヒコウキ」漁法で使う「ハネ」から錘のついたテグスとプラスチック製の擬似餌「カイトン」を伸ばし、根の上や回りを旋回して海の中層にいる魚を狙う漁法である。この「カイトン」を微速で引っ張ると、海中で回転し、それがイワシのように見えるというのである。「カイトン」漁法で、海の深いところを狙うには、糸に錘の多くついたものを使用し、逆に海面ぎりぎりを狙うには、錘のほとんどついていない仕掛けを使用する。この漁法は、「トリヤマ」を発見して魚が海面上にいるが「ヒコウキ」漁で食わないときや、「カッチャクリ」漁でも不漁のときに主に行なう。

この漁法も、根の大きさや水深を正確に把握していないと「カイトン」を海底に引っ掛ける危険性がある。普通、「カイトン」が根の上を通るときは、船のスピードを上げる。すると「カイトン」は自然に海面付近に上昇し、障害物を回避できるのである。いずれにせよ「カイトン漁」を行っている漁師は、海底の地形に精通していなければならない。

「ヒコウキ」や「カイトン」漁で魚が食らいつくと、船から出した「ハネ」が大きくなる。その瞬間、船の速度を微速にし、両手でひたすらテグスを手繰りよせる。釣り上げた魚は、船の中央にある水槽に入れ、活魚として水揚げする。

このように乙浜の漁師は、魚候や海洋現象の変化に応じて、「カイトン」「カッチャクリ」「ヒコウキ」の各々の漁法を使い分ける。同じ海況下でも「カッチャクリ」や「ヒコウキ」などが行なわ

れており、漁師によって選択されている漁法はさまざまである。そのときの海況の読み方と対象魚種の違いによって、それぞれ異なる漁法が展開されているのである。

### ③……………「オカ」での生業活動

#### 1 「オカシゴト」の概要

「オカシゴト」での主要な収入源は、温暖な気候を利用した花卉栽培である。乙浜を含む白浜での花栽培の歴史は古く、昭和8年には旧白浜地区を対象として白浜生花組合が結成されている。戦争中は花栽培が途絶えたが、戦後の食糧難が一段落した昭和30年代から、麦や豆にかわって花の栽培が急激に増加し、新たに白浜花卉組合が結成されている。当時からキンセンカ、ストックなどが露地栽培によって、カーネーション、ユリなどがハウス栽培によって生産されている。

現在では、市場で好評なキンセンカをはじめ、キンギョソウ、ストック、グラジオラス、ハマナデシコといった花の露地栽培、また水稻やラッカセイ、スイカ、トウガラシ、キャベツ、ダイコン、キュウリ、ネギ、トウモロコシ、インゲン、トマトなどの野菜も数多く作られている。花卉全般とトウガラシは「ウリモン」であり、米や野菜は「クイモン」または「オツカイモン」となる。

乙浜での花卉栽培は、ほかの地域にくらべ温暖な冬季に最盛期を迎える。ハマナデシコやセンニチコウなどの夏季に栽培される花もあるが、乙浜で夏花を生産する農家は少ない。夏花は、鮮度保持が難しく、また東北地方から夏花が大量に出荷されるため単価が安いからである。現在は、乙浜の出荷量は横ばいであるが、単価が下落しているため出荷高は減少傾向である。乙浜の場合、ハウスなどの施設を使った高級花はやらず、ほとんどが露地切花生産に従事している。

海浜から山裾まで田畑が広がる乙浜では、それぞれの場所によって耕地の状態が異なり、それに応じた栽培作業が行なわれる。とりわけキンセンカ栽培の場合、水はけが悪く日照が少ない土地は、成長が遅く草丈も短い。逆に、水はけがよく日照も確保されている土地では、あまり肥料をやらなくても成長が早い。草木の成長が遅い土地を「オクジ」といい、成長が早い土地を「ワセジ」という。農家たちは、土地の特性を見分け、それに応じた栽培作業を行っている。

また八幡神社周辺の山裾側の畑は「カゼノカゲ」といわれている。ここは、台風や低気圧が通過しても、背後の山や海側の民家の影響であまり風が吹かず、風害が極めて少ない。一方で、この土地は冷害の影響を受けやすい。そのため、乙浜の住民は、花卉栽培の場合、早期出荷の「クレダシ（年末出荷用）」を主に栽培している。

このように乙浜では、夏季に水稻をつくり冬季に花卉栽培を行う。「この辺の一反の価値は、東北地方の数倍ある」とは、乙浜の住民がよく言う言葉である。夏季の水稻と冬季の花卉栽培という二毛作を行なう乙浜は、冬場に雪で閉ざされる東北に比べ、何倍も稼ぐという意味である。

#### 2 花栽培

乙浜では、さまざまな花卉栽培が行なわれている。なかでも冬場に栽培されるキンセンカは、「オカシゴト」の重要な収入源である。キンセンカは、草丈が70cm以上になる切り花向きの高性種

であり、花は丸型で直立しオレンジ色の大輪が咲く。耐寒性が強く、冬期の生育も旺盛なので、房総半島先端の白浜町や千倉町の白間津などで盛んに栽培されている。乙浜では、11月下旬から3月中旬までの冬期出荷を目的としており、すべてが露地切花生産である。

キンセンカ栽培の歴史は古く、昭和3年ごろから始まり昭和8年には白浜町での栽培者が100名前後になった。当時は花一俵の価格が米一俵と同じぐらいだったという。栽培品種は、当初、房州心黒が中心であったが、房州オレンジキングの導入を経て、現在オレンジスターである。「ウリモン」となる栽培品種は、すべて農協が主導で決定している。隣接する白間津は、客相手の花摘みを行なっている農家が多く、見栄えをよくするため黄金中安という黄色の花やムラジという黒色の花をつけるキンセンカも栽培している。

乙浜の人々が行なっているキンセンカの栽培方法は、次の通りである。

花卉栽培の準備は、8月下旬の稲刈り直後から行なう。「両テンビン」世帯は、8月下旬になると「ハマが止まった（休漁）」ときに一齐に「オカ」に出て稲刈りを行なう。

夏場に水稻、冬場にキンセンカを栽培する二毛作であるため、「両テンビン」世帯の人々は連作障害にとりわけ注意を払っている。稲刈りを終えた田には、市販の栄養剤を入れながら耕起し、苗を作るための「トコヅクリ」を行なう。「トコ」は、各自持っている畑の中でも一番水はけの良い場所を選択する。「トコ」に播種後、その上に藁で編んだ「コモ」を敷く。この「コモ」を敷くことで、土の湿り気を保持するのである。

播種後10日ぐらいすると発芽するので、殺虫剤を葉表に撒布し、追肥も行なう。苗の発芽を待つ期間には、ほかの畑も元肥を十分に施しながら耕作し、苗の「トコウツシ（定植）」に備える。発芽したキンセンカの本葉が5～6枚、葉全体が12～13cmぐらいになると、あらかじめ作っておいた畑の畝に「トコウツシ」する。「トコウツシ」は、幅が約60cmの畝に18cm方形間隔の網目状のネットを張り、ネットの真ん中にキンセンカの苗を植える。したがって一畝3条植えて、株間隔は約18～20cmとなる。このネットは、花をまっすぐ育てるためのものであり、成長するにしたがってネットの高さを上げていく。株と株の間隔が広いと、風通しがよく追肥もしやすいので花が大きくなるという。

その後、定期的に「殺虫」「殺菌」剤を撒布するとともに、追肥も十分に行なう。「トコウツシ」後10日目ぐらいから生育旺盛になるので、本葉6～7枚を残して「ピッチング（摘芯）」を行なう。その後も殺虫・殺菌・追肥を定期的に行ない、草丈が伸びてくると風害を防ぐために茎を補助するネットを張る。

また、乙浜を含む房総半島南端は、冬場に強く冷たい「マニシ（西風）」が卓越するため、畑の周りに防風ネットを張り巡らす。この風は、連日強く吹くため、高性種で大輪の花をもつキンセンカの茎が折れることがあるからである。

キンセンカの出荷は、11月下旬から徐々にじまるが、本格的に出荷するのは12月に入ってからである。3月下旬までの期間内に、正月前の需要を狙った「クレダシ」と彼岸前の需要を狙った「ヒガンダシ」の大きく二回の出荷ピークがある。「クレダシ」は、12月20日から27日の「シゴトオサメ」の時期で、「ヒガンダシ」は、3月10日から21日ぐらいまでである。出荷面積と出荷量は「ヒガンダシ」の方が多い。

「クレダシ」にしろ「ヒガンダシ」にしろ、出荷のピークを迎えると8:00 a.m.から10:00 p.m.まで出荷作業に追われる。出荷は、月・水・金曜日で「オモテビ」という。残りの曜日を「ウラビ」といい、その日は花の刈りこみと箱詰め作業を行う。

「両テンビン」の世帯では、キンセンカの単価が20円を下回ると、出荷額から諸経費をひくと元が取れないため「ハマシゴト」の刺し網漁に切りかえる。また、キンセン花は、「マニシ」が連日吹くと気温が下がり開花しない。そのため、出荷できるだけの荷が集まるか否かを確認し、荷が集まらなければ出荷作業をやめ、イセエビ漁を行なう。

乙浜には、夏の花として「ハマナデシコ」や「センニチコウ」を出荷している「オカイッポウ（農家）」もいる。しかし「両テンビン」世帯では、夏季に「ハマ」でエビ網漁や海女漁があるため、「オカ」に十分な労力が費やせず、夏花をやる世帯はいない。

### 3 水稲作業

乙浜の水稲作業は、換金作物である冬季のキンセンカ栽培の作業日程に強く規定されている。キンセンカを11月下旬から出荷するためには、遅くとも9月上旬には播種を行なわなければならない。播種を行なう苗床が必要となり、8月下旬には稲刈りを終えて田を耕しておく必要がある。したがって、乙浜では4月下旬には田植えを終えておく。

とりわけ5月1日から潜水漁が解禁となる乙浜では、4月25日前後に田植えを完了しておく。通例では、田植えを4月25日前後に行くと8月25日前後に収穫ができる。5月に入ってから田植えは、磯根漁に影響を与えるだけでなく、稲の倒伏の危険性が高くなる。なおのこと、4月中に田植えを行い5月からの磯の口開けに備えるのである。田植えの日は、「ハマシゴト」をすべて休み、家族総出で行っていた。

田植え作業は、苗作りから始まる。4、5年前までは、キンセンカの出荷を終えた畑の端に保温用のビニールシートをかぶせた「保温折衷苗代」をつくっていた。苗作りに使う種籾は、前年から残しておいたものである。ビニールシートのなかでは、約2週間で発芽し、それを田植えに使う。現在は、苗を農協で購入する。以前に比べて金銭的負担はあるが、手間がかからないので好まれている。

田植えは、それまでキンセンカ栽培に使用していた畑を耕しトラクターで代かきを行う。キンセンカとの連作になるため十分に施肥し連作障害を防ぐ。田植えが終わった5月からは、「両テンビン」世帯の労働力が「オカ」から「ハマ」に移る。

乙浜には、背後の山に三つの溜池があり、「ヒガハイル（水田が乾燥する）」場合や穂孕み期には安定した水位が必要であるため溜池の堰の水を落とし田畑に流す。水田の除草は、「ハマが止まったとき」、もしくは「イソメー（磯前）」や「イソアガリ（磯の後）」に行なわれる。田や畔の雑草を刈り、乾燥させて肥料とすることを「カッチイ」というが、現在でも行なわれている。いずれにせよ、水稲とキンセンカの連作障害を克服するため、乙浜の人々はさまざまに工夫しているのである。

稲刈りは、8月下旬の晴れた日に刺し網漁や潜水漁の「ハマシゴト」を1日休んで行なう。家族の労力がすべて稲刈りに出るため、刺し網の投網から回収、そして網の修理には手がまわらないか

らである。刈り終わった稲束を竹で組んだ「ハサ」に一週間ほど吊るし、脱穀する。稲刈りを終わると、水田を耕起しキンセンカ栽培用の畑をつくる。

#### 4 自家用野菜の栽培

乙浜では、キンセンカの「ヒガンダシ」が終了する3月下旬以降、自家用野菜を栽培する。「ヒガンダシ」後は、陽気が続くとキンセンカが急速に生長するため、早急に耕さなければならない。野菜用の畑に耕し直すときは連作障害を防ぐための肥料を大量に混ぜ込む。キンセンカの畑を耕起したあと、4月上旬から中旬にかけて各種の野菜を播種する。

栽培される野菜は、ラッカセイ、トウモロコシ、キュウリ、カボチャ、トマト、スイカ、ピーマンなど多岐にわたる。また、キャベツ、ハクサイ、ダイコンなどは、キンセンカ畑のなかの「ミノテ」を植える。キンセンカは、水分の多い土壌に不向きであるため、その場所に野菜類を植えるのである。

「両テンビン」世帯は、夫が4月下旬からイセエビの刺し網漁をはじめ、また妻は5月から潜水漁を始める。そのため、全ての畑の耕作や播種は遅くとも4月下旬までには終えておく。5月にはいると、刺し網漁と潜水漁という「ハマシゴト」が中心となるため、妻が「イソメー（潜水漁前）」や「イソアガリ（潜水漁後）」、また「ハマが止まった」時に「オカ」に出て除草や施肥を行なう。7月上旬からトマト、キュウリなどの収穫にはじまり、8月の盆時期にはラッカセイが収穫される。

盆時期に親類への「オツカイモノ」としても利用されるラッカセイの収穫が終わると野菜畑はすべて耕される。この時期、夫は「ハマ」で刺し網漁をしているため、野菜畑の耕作作業は「イソメー」や「イソアガリ」、また「ハマが止まった」時などに妻が中心となっていく。まずキンセンカの苗床をつくる畑から耕し始め、8月下旬までにはすべての畑がキンセンカ栽培用になる。

このように自家用野菜の栽培は、4月中旬に行なわれる耕作と播種作業、また8月中旬頃の収穫作業に夫婦二人の労力を集中させ、そのほかの5、6、7月は妻が潜水漁の「イソメー」や「イソアガリ」時に除草や施肥などの「オカシゴト」を行なう。

### 4……………「両テンビン」世帯の生業構図

#### 1 「両テンビン」世帯の年周期

これまで乙浜で展開されている「ハマシゴト」と「オカシゴト」を概観してきた。本節では、「両テンビン」世帯が各々の生業を年間を通じていかに組み合わせているのかという「年周期」と、1日のなかでの組み合わせ「日周期」の考察から、「ハマ」と「オカ」との協奏である「両テンビン」の生業構図をみてみたい。本項では、「両テンビン」世帯の「年周期」に着目する。図3は、典型的な「両テンビン」世帯であるA氏夫妻の年周期を模式化したものである。

乙浜では、5月1日に潜水漁が解禁になるため、少なくとも4月下旬までには田植えを完了しなければならない。そのため4月は、田畑の耕起や作付けなどの「オカシゴト」が中心となる。ただ、この「オカシゴト」の合間に、夫は「ハマ」で刺し網漁も再開する。5月に入ると妻の潜水漁が解

禁となり、夫の刺し網漁とともに夫婦の労力は「ハマ」が中心となる。その後、6月から7月にかけて刺し網漁が禁漁期に入る。「両テンビン」世帯の夫たちは、この2ヶ月間、「ハマ」で刺し網の修理を行ないながら8月の解禁日に備える。妻たちは、潜水漁を続け、「ハマが止まった（休漁）」ときに除草や施肥といった「オカシゴト」を行なう。

8月に入ると刺し網漁が再開され、夫婦二人の労力は再び「ハマ」が中心になる。とりわけ8月上旬の「出エビ」の頃は、刺し網の回収や仕分け作業に費やす時間が多くなる。この時期は、早朝の涼しい「イソメ（潜水漁前）」に「オカ」で畑の除草や自家消費野菜の収穫を行なうことが多い。しかし、刺し網回収作業が連日続くため、疲労が溜まり、「オカシゴト」に出る回数が減少する。

8月下旬になると「ハマシゴト」をすべて休んで稲刈りを行なう。キンセンカの播種作業を最優先するため、その時期に水田をすべて終える必要があるからである。同時に、自家消費野菜の畑もすべて耕起し、冬期のキンセンカ栽培に備える。その後、9月10日になると潜水漁が禁漁になり、妻の労力はすべて「オカ」のキンセンカ栽培にむけられる。この時期は、播種や定植、除草、施肥などのキンセンカ栽培作業に多くの労力を費やすため「ハマシゴト」が少なくなる。実際、2000年9月にA氏が刺し網漁に出漁した日は4日間である。9月に入ると、規定寸法以下のイセエビが多くなることもひとつの原因である。

10月から11月にかけて、畑の周囲に防風網を張り巡らす作業や殺菌・殺虫作業が続き、夫婦の労力はすべて「オカ」に向う。12月上旬になるとキンセンカの出荷作業が徐々に始まるが、この時期は花卉単価が安く、また出荷本数が揃わないこともあり出荷量が少ない。とりわけ彼らは、花卉単価が20円を下回ると利益が出ないため、「ハマシゴト」の刺し網漁に変更する。A氏は、キンセンカの単価が低調であった2000年11月29日から12月5日前後まで、刺し網漁を再開している。

12月中旬を過ぎると、「クレダシ」用の出荷作業が忙しくなる。早朝、「オカ」に出て出荷可能なキンセンカを切り取り、午後から箱詰め作業を行なう。こうした出荷作業は、「クレダシ」出荷の最終日である12月27日まで続けられる。この作業が終わると、イセエビ刺し網漁を再開し、正月用の「オツカイモノ」を獲る。2000年12月は、28日と29日に2日間出漁している。

1・2月は、市場の休みが多く、花卉単価も安いので出荷量は少ない。この時期は「ヒガンダシ」用のキンセンカの施肥や殺菌、殺虫作業が絶え間なく続く。夫婦の労力は「オカシゴト」が中心である。1・2月でも、花卉単価が20円を下回ると、出荷可能なキンセンカを放置し、「ハマ」で刺し網漁を再開する。

3月に入るとキンセンカの出荷作業が再びピークを迎える。この時期は、たとえ「ハマ」でイセエビが好漁であっても「オカ」でのキンセンカ出荷作業が最優先される。この「ヒガンダシ」の出荷作業は3月21日まで続けられる。この作業が終わると、キンセンカの根がさらに生長する前に耕起し、水稻と自家消費野菜の畑を作る。そして4月中旬になれば、田植え作業を始め、「ハマ」ではイセエビ刺し網を再開する。

これが「両テンビン」世帯であるA氏夫妻のおおよその年周期である。彼らは、5月から「ハマシゴト」を始めるため「オカ」の田植えを終えたり、冬季のキンセンカ栽培を優先するため「ハマ」を休んで「オカシゴト」に力点を置く。彼らにとって、夏季の「ハマシゴト」と冬季の「オカシゴト」



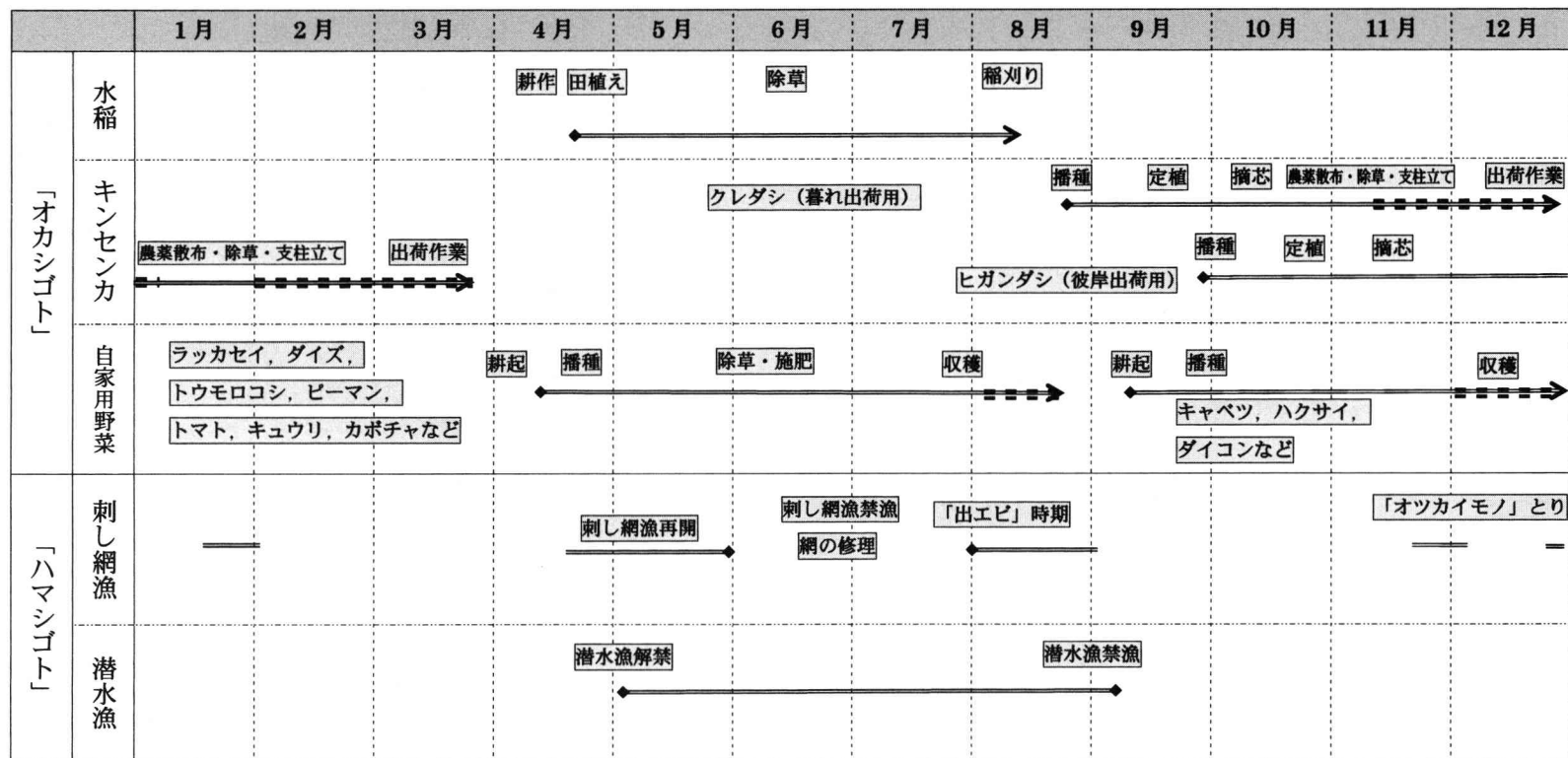


図3 「両テンビン」世帯の年周期

ト」がすべてを優先し、生業活動の基調となる。それに加え、冬季に花卉単価が20円を下回ると「ハマ」で刺し網漁を再開し、夏季に「ハマが止まった」とときには「オカシゴト」を行なうなど、とりまく資源の変動や市場での漁獲・花卉単価の変動に応じて、「オカシゴト」と「ハマシゴト」を柔軟に繋ぎ合わせる。

## 2 「両テンビン」世帯の日周期

本項では、「両テンビン」世帯が、個々の生業活動を1日のなかでいかに組み合わせているのかという日周期をみてみたい。2000年度の著者の調査を踏まえると、彼らの一日の使い方について、「ハマシゴト」と「オカシゴト」の典型的な組み合わせが5タイプあることがわかった。図4は、典型的な組み合わせを表した架空の日を設定し、月別で示したものである。図の順に沿って「両テンビン」世帯の労働内容と時間配分をみる。

タイプ①の日周期は、刺し網漁が最盛期に入り、夫婦二人の労力が「ハマシゴト」に集中される8月が該当する。

この月は、夫婦二人とも、2:30 a.m.に起床し3:00 a.m.から刺し網の回収に入る。4月や5月は一回に20タン前後を投網していたが、最盛期である8月は投網規制最大限の50タンを仕掛ける。加えてイセエビ1匹の「ツブ（体長）」が大きく、また海藻類とりわけカジメ類が春に比べて生長しており、刺し網に大量に付着する。そのため刺し網の回収・出荷作業に多くの時間が費やされる。3:30 a.m.前後から始まる回収作業は7:30 a.m.までかかる場合もある。そのあと夫は5:00 p.m.頃まで「ハマシゴト」に従事する。妻は、刺し網の作業後、10:00 a.m.頃から3:00 p.m.まで潜水漁に従事し、潜水漁の水揚げが終わると海女小屋で約1~1.5時間ほど休憩する。A氏いわく「8月は刺し網漁にかかる時間が長いから一年のなかで一番しんどい月」といい、「イソアガリ（潜水漁の終了後）」に「オカ」へ出る回数は少ない。「オカ」は、「ハマが止まった（休漁）」ときに出て、自家消費野菜の収穫や除草を行う。

8月は、刺し網漁の最盛期であるため夫が「ハマシゴト」に一日約14時間以上、妻も13時間以上を費やすことが多い。むしろ夫婦二人の労力は「ハマシゴト」が中心となる。そして「ハマが止まった」ときに「オカ」に向かい、自家消費野菜の収穫、キンセンカの苗床や播種作業を行なう。

タイプ②の日周期は、キンセンカの出荷が最盛期になり、夫婦とも早朝から晩まで「オカシゴト」に集中する3・12月が該当する。

キンセンカの出荷が最盛期を迎えるこの時期は、夫婦とも7:00 a.m.に起床し、8:00 a.m.前後には「オカ」に出る。午前中に「オカ」で出荷可能なキンセンカを切り出し、自宅の作業小屋まで運び、1:00 p.m.頃から箱詰め作業を行なう。この箱詰め作業は9:00 p.m.頃まで行なわれる。火、木、土の「ウラビ（出荷しない日）」は、畑に出てキンセンカの切り取り作業を中心に行ない、月、水、金の「オモテビ（出荷日）」にまとめて出荷する。こうした出荷作業は、「クレダシ」の場合、12月27日まで続けられ、「ヒガンダシ」の場合、3月21日まで行なわれる。

この時期はキンセンカの出荷作業がピークを迎えるため、夫婦二人の「オカシゴト」は1日約12時間以上を費やすことが多い。冬季はキンセンカ栽培による収入が重要であるため、「オカシゴト」がなによりも最優先される。

タイプ③の日周期は、夫婦二人の労力が「ハマ」を中心としながらも、「オカ」での作業も組み入れている5・6・7月が該当する。

5月は、3:00 a.m.から始まる刺し網漁の回収作業に合わせて、夫婦二人ともに2:30 a.m.頃起床する。その後、刺し網の回収作業を約3~3.5時間従事し、7:00 a.m.前後には終了する。漁獲物を水揚げした後、夫は、9:00 a.m.頃から5:00 p.m.まで「ハマシゴト」に従事する。一方、刺し網漁が禁漁に入る6・7月は、9:00 a.m.頃から6:00 p.m.まで、磨耗した刺し網を1タンずつ修理する。この時期、妻も10:00 a.m.頃から5:00 p.m.頃まで潜水漁を行ない、天気のよい日は「イソメー」や「イソアガリ」に「オカ」で畑の除草や施肥を行なう。

これらの月は、刺し網漁や潜水漁などの「ハマシゴト」に、夫婦とも1日約9~12時間を費やす。このほか、水田や畑の除草や施肥、野菜類の収穫といった「オカシゴト」も約1~1.5時間行なう。夫婦二人の労力を「ハマ」中心としながらも、「オカ」での作業も組み入れている。

タイプ④の日周期は、キンセンカの殺菌や施肥といった「オカシゴト」に重きを置きながら「ハマシゴト」も行なう9・10・11・1・2月が該当する。

9・10・11月は「クレダシ」用の栽培作業を行ない、1・2月は「ヒガンダシ」用の栽培作業である。この時期は、殺虫や殺菌、除草、また補助ネットを張る作業に多くの時間を費やす。夫婦二人は、こうした「オカ」での作業を9:00 a.m.頃から5:00 p.m.頃まで行なう。雨天で「オカ」に出られないときは、「ハマ」で刺し網の修理を行なう。11月中旬からキンセンカの出荷が始まるが、花卉単価が20円を下回ると出荷作業を止め、「ハマ」の刺し網漁を再開する。とりわけ11月下旬から12月上旬に刺し網漁を行なうことが多い。この時期はキンセンカ栽培作業が中心であり、夫婦二人は「オカシゴト」にそれぞれ1日約9時間費やす。一方、花卉単価や気象条件に応じて刺し網漁や網の修理といった「ハマシゴト」も取り入れる。

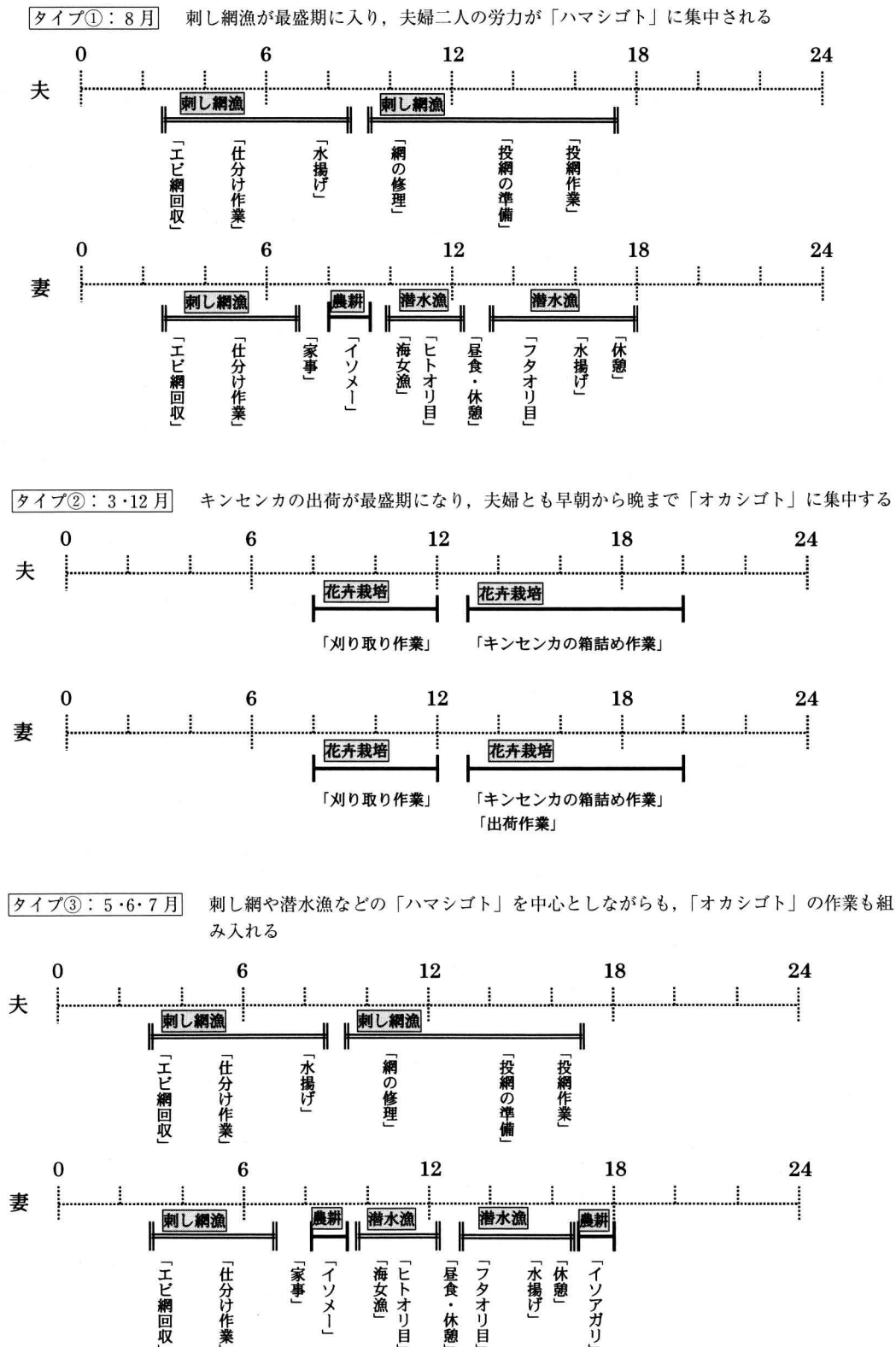
タイプ⑤の日周期は、キンセンカの出荷作業が終わり、夫は刺し網漁などの「ハマシゴト」を再開し、妻は「オカ」でキンセンカ畑を耕起する4月が該当する。

この月は、キンセンカの出荷作業が終わり、夫は刺し網漁を再開する。夫婦二人とも2:30 a.m.に起床し、3:00 a.m.から刺し網の回収作業に入り、7:00 a.m.頃まで行なわれる。そのあと夫は、9:00 a.m.頃から5:00 p.m.まで「ハマシゴト」に従事する。妻は、午前の刺し網回収作業が終わったあと、キンセンカ出荷後の畑を耕起し、水稻や自家消費用の野菜畑を作る。夫も「ハマが止まる」と「オカ」に出て妻の作業を手伝う。

4月は、夫が刺し網漁を再開したため「ハマシゴト」に1日約12時間費やし、妻は畑の耕起や播種といった「オカシゴト」に8時間、刺し網漁の回収や仕分けなどの「ハマシゴト」に4時間従事する。つまり、夫は「ハマシゴト」、妻は「オカシゴト」中心となる。

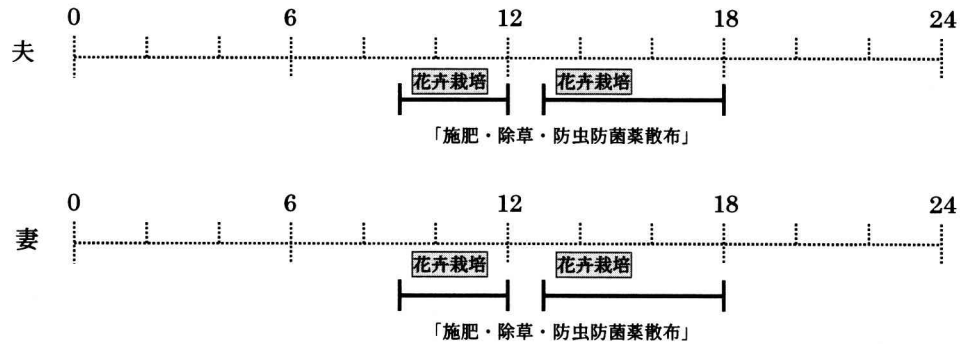
これが「両テンビン」世帯A氏の「ハマ」と「オカ」との典型的な労力の組み合わせである。彼らは、刺し網漁が最盛期を迎える8月やキンセンカの出荷作業がピークを迎える3・12月、「ハマ」を中心としながらも「オカシゴト」を入れる5・6・7月のように、1日のなかでも「ハマ」と「オカ」を行き来しつつ、夫婦二人の労力の集中と分散を繰り返しながら環境（自然環境・市場経済）に対応している。

図4 「両テンビン」世帯の日周期



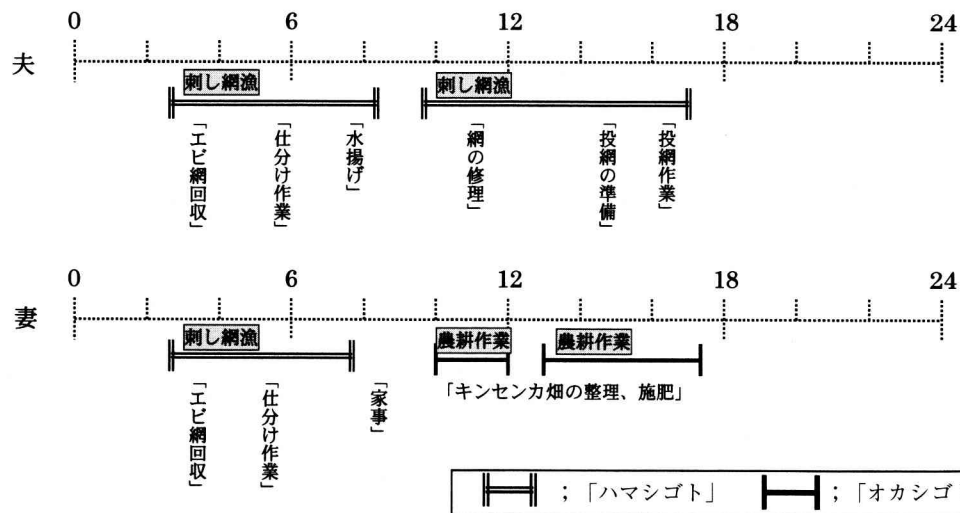
タイプ④：9・10・11・1・2月

花卉栽培の殺菌や施肥といった「オカシゴト」に重きを置きながら、合間に刺し網漁などの「ハマシゴト」も行なう



タイプ⑤：4月

夫は刺し網漁を再開し、妻は「オカシゴト」である。夫は「ハマ」、妻は「オカ」が中心となる



### 3 生業の複合を可能にする要因

「両テンビン」世帯は、夏季に最盛期をむかえる磯根漁と冬季の花弁栽培とを年間を通じて組み合わせる。こうした複合的な生業を可能にする要因を考えると、①乙浜をとりまく自然条件、②農協の主導性などの社会条件、③さまざまな情報を共有することによる在地住民の集団的な対応、の3つの側面に求めることができる。

乙浜を含む白浜町は、「真冬菜種の花が咲く」と白浜音頭にも歌われているように暖冬涼夏な気候である。こうした条件下、冬季に出荷のピークを迎えるキンセンカやストックなどの花卉が多く栽培されている。なかでもキンセンカは露地栽培が可能であるため、ビニールハウスやガラス温室といった特別な資本整備を必要としない。また、種子繁殖であるため球根繁殖に比べ種苗費などの生産費が安く済む。露地栽培ゆえに天候に影響されやすいが、投下する初期資本が少なくすむため、農業を専業としない「両テンビン」世帯でも積極的に栽培できるのである。また、冬季出荷を主とするキンセンカは、夏季の水田稲作の裏作としての栽培が可能であり、乙浜の偏狭な土地の有効利用ができていることも1つの要因であろう。

一方、「ハマ」の自然条件に目を向けてみると、とりわけ乙浜は、漁港の先に「シマ」や「ゼンベイジマ」という大きな岩礁があり、潜水漁や刺し網漁などの主要な漁場になっている。このポイントは、漁港から近いため移動時間が少なく、また水深2～5mと浅瀬であるため多くの海女たちが操業する。なかでも「ハマシゴト」と「オカシゴト」を掛け持つ「両テンビン」世帯の海女たちにとって、主要な漁場が近場にありなおかつ浅瀬であることは体力的にも有利である。

また沖にある消波堤や投石場のように、イセエビの生息場となる地点も整備され、安定した漁獲量を上げることができる。乙浜全体の漁獲高に占める潜水漁や刺し網漁といった磯根漁の割合は87%（1999年度）であり、磯根漁が「ハマシゴト」での重要な収入源になっていることがわかる。

一方、市場と生産者を取り持つ農協の役割や、首都圏の花弁消費地に近いといった社会的な条件も重要となる。花卉出荷は、昭和50年頃から農協が主体となった共同出荷が実施されている。これは共選販売制度といわれるもので、生産者が荷をまとめ、農協が各地区の花弁市場と契約し販売する。この共選制度の取引先市場は、川崎や多摩、長野、埼玉など計10ヶ所あり、市場の選択をすべて農協が一任している。そのため、生産者は市場と直接取引する必要がなく、農協が決めたサイズを揃え、特定の花弁集荷場に運ぶだけである。農協が安定した取引先と契約することや農薬などの情報を公開することなどを通じて「オカシゴト」に専念できる環境を作り上げていることも大きな要因であろう。

こうした自然的・社会的な条件に加え、実際の現場では、「両テンビン」世帯を含む多くの住民同士がさまざまな情報を共有し、対応している。

乙浜の住民たちは、例えば、昼間に潜水している海女たちからの海況に関する情報を共有したり、刺し網漁終了後にその日の漁獲情報を話し合ったり、またキンセンカ栽培の播種日の設定や花卉単価の情報も交換する。また、花卉の蕾の固い状態から、かなり開ききった状態まで、4枚の写真を生産者全員で持ち合い、時期や市場に対応した花卉情報を住民内で共有している。このほか、「タンソ病」や「ウドンコ病」の状況や農薬の使用法といった情報なども積極的に交換する。こうし

た事例は枚挙に遑がない。

彼らは、生業活動に関わる事柄を話し合うことで、たえずお互いの情報を結びつけている。世帯間で情報を共有することは、逆に個々の世帯の行動が、ある集団の固有な慣行や考え方、約束事などに色濃く影響を受けることになる。この場合の集団とは、特定の知識や情報を共有している範囲と考えることができる。情報の共有によって各世帯の方向性や対策が定まることで、全体としての生産性を向上させる働きも生まれる。このように、情報の交換を介した在地住民の適応手法も生業を「両テンビン」とする上で重要な意味をもっているといえる。

## まとめ——生業を「両テンビン」することの意味——

本稿では、夏季の磯根漁と冬季の花卉栽培を生業の中心とする「両テンビン」世帯に着目し、その生業活動の実態をみてきた。しかしながら、生業の複合性を問うとき、単にこれらの世帯がどのような生業を展開しているのかだけを問題とするのでは不十分である。選択された生業のみを捉えるだけでなく、乙浜地区において生業を「両テンビン」とする意味、すなわち複合性がもつ意味を問う必要がある。ここでは、こうした問いに対し一考察を加えてみたい。

乙浜では、全158世帯のなかで、「ハマイッポウ（漁業専門の世帯）」や「オカイッポウ（農業専門の世帯）」と呼ばれる世帯数の方が多い。このなかで「両テンビン」世帯は、わずか7世帯を数えるにすぎない。乙浜では、農業や漁業を専門とする生計活動がむしろスタンダードであるといえる。

こうした乙浜において、生業を「両テンビン」とすることは、むしろ同地域内に並存している「ハマイッポウ」や「オカイッポウ」と異なった意味を内包する。「両テンビン」世帯が年間を通じてバラエティー豊かに生業を展開することは、市場価値に対応した利潤の最大化を試みる側面と予測できないリスクを少しでも緩和する側面がある。しかし他方では、多くの生産物を大都市の市場経済のなかに組み込んでいるため、夫婦そろって多くの労働力を投下し、また彼らの生産活動自体が市場での需要変動にコントロールされるという側面もある。

このように「両テンビン」世帯の生業戦略は、複合生業による利益の最大化やリスクの回避という経済的な利点を、労働の日周期で示されていたような「ハマ」や「オカ」を行き来する投下労働量でトレードオフした関係にあるといえる。

乙浜と同じく、太平洋に面した温暖な地域である三浦半島を調べた辻井によると、この地域の多くの世帯は、少ない農業生産力を補うために、農業だけでなく刺し網や潜水漁などの農間漁業を組み合わせた生業活動を行なっているという。これは、各々の生業活動だけでは生計を維持することができないため、複雑な生業層が形成されていると指摘している〔辻井 1977：62-66〕。

一方、乙浜では、「ハマイッポウ」や「オカイッポウ」世帯が多いことから分かるように、必ずしも複合的な生業を行わなければ生計が維持できないというわけではない。このなかで、特定の世帯のみが生業の複合性を選択しているのである。「両テンビン」世帯の複合性への志向は、三浦半島の農間漁業が示しているような、いわば「不十分な生産力を補う相互補完的な戦略」ではなく、「潜在的な生産力を最大限に引き出す戦略」という意味合いが強い。

そして、現時点では、こうした生業戦略が利益の最大化を生み出している。「オカ」や「ハマ」からの詳細な利益割合は把握できなかったが、「両テンビン」世帯の自宅や土地、所有するモノなどをみると、村内での相対的な稼ぎぶりが想像できる。複合的な生業による「利益の最大化」か「危険の最小化」かは、とりまく環境（社会・自然）の変動に起因するが、市場変動によるリスクの影響はいまのところ大きな問題となっていない。こうした事実を踏まえると、生業を「両テンビン」とする背後には、やはり夫婦二人の投下労働力を裏打ちするだけの強力な経済的思索があるといえる。

そして2で見たように、とりわけ夏期の「ハマシゴト」では、「両テンビン」世帯の海女たちが中心となって、その日の海況に関する情報を共有している。

もちろん情報の共有は「両テンビン」世帯に限らない。しかし海女たちは、夫である「両テンビン」世帯の刺し網漁師に伝えることが多いため、刺し網漁師のなかでも情報に濃淡があるのは事実である。2000年度現在、妻が海女である「両テンビン」世帯の刺し網漁師は3人おり、いずれも海女からの情報に応じた行動がとられていた。

ではなぜ、「両テンビン」世帯の海女たちは情報を交換しているのだろうか。「両テンビン」世帯が海況に関する情報を交換するのは、2つの意味があるといえる。

ひとつは、情報の交換によって漁獲量を最大限に引き出す側面があることはいうまでもない。とくに、好漁場が判断できる「海水温の変動」や、ゴミの付着を回避できる「潮流の方向」といった情報は、その結果が漁獲の多寡に直接的に影響する。海女である妻は、潜水漁で得た海況に関する情報を夫に提供することで、その日の次に続く刺し網漁の布石を築いているのである。「両テンビン」世帯では、潜水漁から刺し網漁へと続く「ハマシゴト」をひとつのセットとし、夏季の現金獲得を組み立てているのである。

また乙浜において、年間を通じて漁撈活動を行なう「ハマイッポウ」世帯は、予備の刺し網数や船外機の排気量を増やすなど、個々の装備を充実させることで漁撈活動に対応している。一方、夏季しか漁撈を行なわない「両テンビン」世帯は、装備を充実させる「ハマイッポウ」世帯に対し、海況に関する最新の情報によって対応しているといえる。

このように「両テンビン」世帯の刺し網漁師は、集団内で情報を交換し、それを背景として漁場環境に対応している。この刺し網漁は、気象や海洋などの漁場環境に敏感に影響を受けるイセエビを狙うゆえ、投網前の「潮流」や「風波」に関する情報がより重要となるからである。なお、この場合の集団とは、海女である妻から刺し網漁師である夫に情報提供しているように、家族が基本となっている。

本論では、生業活動における金銭的な問題に触れることができなかった。今後は、とりわけ「両テンビン」世帯における「オカ」と「ハマ」との具体的な収入バランスの問題を取り上げなければならない。また、実際の自然の脅威や社会経済の変動に直面した際、「両テンビン」世帯と「ハマイッポウ」や「オカイッポウ」世帯との対応差や収入差についての分析が重要となる。



## 註

(1)——菅は、生業の複合性に関して「問題は、生業複合を行ういかなる動機づけが、現実そこに求められていたのかを明確にしなければならない」とし、「リスク回避」と「利益の最大化」は常に相対的視野に収めなければならないとしている〔菅 2001: 23〕。

(2)——松井は、中心的生業に比べてより小さな経済的意味しかもたないが、集団において脈々と受け継がれてきた活動をマイナー・サブシステムと呼び、主生業を含めた生業活動全体を解き明かす端緒になると指摘している〔松井 1998: 247-268〕。たとえば、漁従事者の趣味的な関心が強く働いているというウグイのセノヨボリ漁〔佐治 1998: 148-176〕や、採集された魚介類が特定の集団内で消費され、経済的に重要でない久高島の海浜採集活動〔高山 1999: 33-71〕など、経済性にとらわれない生業活動の事例は多い。

(3)——このほか、高桑は日本の伝統的漁民を分類する過程で、農業と兼業で漁業に従事する「農民漁業」の概念を提示している〔高桑 1984: 59-61〕。また、低湿地において生業複合の一つである鳥猟に着目したもの〔菅 1990: 41-81〕などがある。いずれにせよ、在地の住民が展開する複合的な生業活動の実態を明確にしようとする試みは評価できる。

(4)——とりわけ海付き村の生業活動を包括的に捉えた論文が少ないことに関して、安室は、漁撈にはそれだけでも十分に調査者に研究を動機づけるだけの強いインパクトがあり、また海付き村で行なわれている生業はすべて漁撈であるという考えが強く、水域と陸域との生業を対応させて理解することがなかった〔安室 1992: 49-50〕としている。

(5)——軌道調査実施日は、イセエビ刺し網漁解禁日である8月2日から8月30日までの29日間のなかで、実際に出漁した計16日間である。

(6)——著者が直接確認したもの、及び聞き取り調査から作成した。魚類の同定には、蒲原稔治〔1981〕を使用した。

(7)——表中は、例えば「◎ブダイ(2/4)」であれば、「ブダイが4匹混獲され、そのなかの2匹がオツカイモノとして用いられた」ことを意味している。

(8)——この表は、刺し網で混獲された魚介類のなかで、魚種や魚体の大小、腐敗の程度などは考慮せず、個体数のみを対象としている。

(9)——香原は潜水漁における漁場までの移動方式の相違に起因して、無介助方式の「カチド」「フナド」、そして介助方式の「チナ」に分類している〔香原 1975: 134-138〕。乙浜の潜水漁と対比してみると、「カチド」が「オカアマ」、フナドが「ノセノセ」、チナが「オトアマ」となる。

(10)——錘の利用や引き上げを介助してもらうことで、潜水や浮上の時間短縮だけでなく、潜水浮上の際の酸素消費量を減らす効果がある。酸素消費量が減少すると、必然的に潜水時間が増加するという〔小林 1975: 11〕。すなわち、介助方式の「オトアマ」は、潜水漁のなかでもっとも効率のよい方法といえる。

(11)——篠原は、「自然知」を文字を媒介にして獲得される「文字知」の対概念として位置づけ、「生物的世界」という自然と対峙するときの知性や感性〔篠原 1998: 2-3〕としている。

## 引用文献

- 蒲原稔治 1981 『原色日本魚類図鑑』Ⅰ・Ⅱ 保育社  
 小林庄一 1975 『人と潜水』 共立出版  
 香原志勢 1975 『人類生物学入門』 中央公論社  
 佐治靖 1998 「ウグイ漁とナレズシ」篠原徹編『民俗の技術』 朝倉書店  
 篠原徹 1998 「民俗の技術とはなにか」篠原徹編『民俗の技術』 朝倉書店  
 菅豊 1990 「『水辺』の生活誌」『日本民俗学』181 日本民俗学会  
 2001 「自然をめぐる民俗学研究の三つの潮流」『日本民俗学』227 日本民俗学会  
 高桑守史 1984 「伝統的漁民の類型化にむけて」『国立歴史民俗博物館研究報告』4  
 高山佳子 1999 「伊良部島の海浜採集活動」『動物考古学』13 動物考古学研究会  
 田和正孝 1990 「仕切書による漁場利用形態の分析—和歌山県南部町南部の刺網漁—」『関西学院史学』23  
 辻井善弥 1977 『磯漁の話』 北斗書房  
 1980 『ある農漁民の歴史と生活』 三一書房  
 原子令三 1972 「嵯峨島漁民の生態人類学的研究」『人類学雑誌』80—2

- 
- 松井健 1998 「マイナー・サブシステムの世界—民俗世界における労働・自然・身体—」篠原徹編『民俗の技術』朝倉書店
- 安室知 1992 「存在感なき生業研究のこれから」『日本民俗学』190 日本民俗学会
- 1998 『水田をめぐる民俗学的研究』慶友社

(総合研究大学院大学文化科学研究科・日本学術振興会特別研究員)

(2002年2月12日受理, 2002年10月4日審査終了)

---

## **An Ecological Study of the RYOTENBIN Household in Otohama, Chiba**

UDA Shuhei

Otohama is at the tip of the Boso Peninsula. It has an area of about 1.56 square kilometers, the number of 158 households, and a population of 447. People there live by fishing such as gill-net of spiny lobster and flatfish, diving of abalone and turban shell, pole-and-line fishing of yellowtail and oceanic bonito, and horticultural agriculture such as the cultivation of flowers, rice farming, and growing their own vegetables.

They call the RYOTENBIN household which does both fishing and horticultural agriculture. On the other hand, there are households which follow only fishing, called HAMAIPPO. The number of HAMAIPPO households is 14. They are being engaged in fishing such as gill-net and pole-and-line fishing through the year. And there are full-time farmers called OKAIPPO, too. They cultivate rice, vegetables and flowers to ship in summer and winter.

In this paper, the author described natural environments, subsistence activities of agriculture and fisheries in Otohama. Chief themes are; ①How the subsistence activities of RYOTENBIN household goes. ②The relations between "HAMASHIGOTO (Fishing)" and "OKASHIGOTO (horticultural agriculture)" in a day and a year cycle. ③The purpose of compounding subsistence activities in RYOTENBIN households.

RYOTENBIN households are engaged in fishing, such as diving and gill-net in summer and floriculture, such as cultivating pot marigold and stock in winter. This is the meaning of maintaining the balance of income from both of fishing and agriculture. They are being engaged in various subsistence activities through a year.

In Otohama, the household of HAMAIPPO and OKAIPPO hold a majority. Currently, the number of RYOTENBIN households is 7 in Otohama. Therefore, it can be said that they do not necessarily need various subsistence activities for their living. The RYOTENBIN households have some economical advantages in comparison with the HAMAIPPO and OKAIPPO households.

One of the advantage of various subsistence activities in RYOTENBIN households is to ease the influence of the critical moment (unseasonable weather or economic change etc.). On the other side, they can get surplus profits from their subsistence activities. The former is

---

---

“Risk avoidance”, and the latter is “The maximization of the profit”. But, more working force is necessary for the RYOTENBIN households. The purpose of various subsistence activities is not the strategy for making up for the less production capacity of their land, but it is the strategy for more production capacity is to be taken out.